
初恋の相手は前世の自分

無為自然

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋の相手は前世の自分

【Nコード】

N5427V

【作者名】

無為自然

【あらすじ】

イケメンでもなく顔が悪いわけでもなく、特にこれといった特徴のない平凡な少年三谷海斗。だが彼は両親に愛されてなかった。授業参観はもとより家族らしいことは一切してもらったことがなかった。そしてある日両親の喧嘩のとぼちりで彼の短い人生を終えてしまう。彼は死んだと思われていたが、目覚めると彼が十五年間つきあってきた平凡な姿とは、似ても似つかない姿のだった。艶かな長く淡い青色の髪。水晶のように透き通る青い瞳。薄桃色の唇。陶器のようになめらかな白い肌。どこからどう見ようと紛れもなく少

女の姿だった。しかもかなりの美少女。ところが彼にはその姿には
見覚えがあった。

そう、それは彼の初恋の相手だった。

登場人物設定（前書き）

初めて読む方はネタバレ注意

登場人物設定

名前…シーナ・ウィンドル・ソフィネット

種族…人間

身分…ランゴヴァルト王国の名門ソフィネット家（侯爵家）

の長女

性別…女

年齢…13歳、身体は10歳ほど

誕生日…7月14日

身長…135.7cm

体重…34.2kg

容姿…腰に届く淡い青色の髪、青い瞳、絹のように白い肌

性格…食いしん坊

趣味…料理、エリスを愛でること

特技…魔法、剣術、料理

好きなもの…エリス、甘いお菓子

嫌いなもの…エリスを悲しませるもの全て

備考…三谷海斗という普通の中学生だったが初恋の相手（前世）の身体になる

本来魔法学校に入学できる年齢だが、身体が成長してないとエリスのそばにいたためしていない

●ステータス

筋力… D +
 耐久… C
 敏捷… A -
 魔力… S S +
 戦闘技術… A

●魔力変換資質（10歳）

火	… 4 4 8		C -
水	… 9 1 9 2		S S
土	… 3 3 2		D
風	… 7 2 3 0		S +
光	… 7 8 9 0		S +
闇	… 1 3 5		E
魔力	… 9 7 1 3		

レベル、500で実用レベル、5000で宮廷魔術師レベル
 100で常人



名前…エリス・ウィンドル・ソフィネット

種族…人間

身分…ランゴヴァルト王国の名門ソフィネット家（侯爵家）

の次女

性別…女

年齢…10歳

誕生日…9月7日

身長…133.8cm

体重…32.4kg

容姿…腰に届く淡い青色の髪、青い瞳、絹のように白い

肌、一本のアホ毛

性格…甘えん坊

趣味…シーナに抱きしめてなでなでしてもらうこと

特技…甘えること

好きなもの…シーナ、ぬいぐるみ

嫌いなもの…シーナとの時間を邪魔するもの

備考…本来シーナとは三つ歳が離れているのだが、シーナの身体は10歳のままなので体格、容姿ともに似ているのでよく双子と間違われる。

●ステータス

筋力…D-

耐久…C

敏捷…B

魔力…？

戦闘技術…E

●魔力変換資質（10歳）

不明



名前…アルバート・ウィンドル・ソフィネット

種族…人間

身分…ランゴヴァルト王国の名門ソフィネット家（侯爵家）

の当主

性別…男

年齢…41歳

誕生日…5月27日

身長…178.7cm

体重…71.2kg

容姿…白髪交じりの青髪、青色の瞳、ガタイのいい身体

性格…冷徹、理知的、親バカ

趣味…読書、

特技…魔法、剣術

好きなもの…娘2人と妻

嫌いなもの…娘を泣かせるもの全て

備考…二つ名霧の王キングミストを持つかつて魔物の大進行から祖国を救った英雄
辺りに視界を遮る濃い霧を発生させ幻覚を見せたり、陰を操ったり
隙を突いてナイフで攻撃したりと魔法よりも戦闘技術に頼り搦め手
を得意とする。

●ステータス

筋力…B
耐久…B
敏捷…A＋
魔力…S－
戦闘技術…SS＋

●魔力変換資質

火	3	4	4		D
水	4	6	6	0	S－
土	1	3	2		E
風	3	4	3	4	A＋
光	4	8	9		C－
闇	5	5	3	9	S
魔力	5	6	3	6	



名前…シルヴィア・ウィンドル・ソフィネット

種族…人間

身分…名門ソフィネット家の当主アルバート・ウィンドル・ソフィネットの妻

性別…女

年齢…32歳

誕生日…11月21日

身長…148・4cm

体重…42・8kg

容姿…銀髪、瞳は鳶色、小柄だがスタイルは抜群

性格…親バカ、おっとり、ドジ

趣味…娘の着せ替え

特技…治癒魔法

好きなもの…娘2人と夫、料理（ただしものすごく下手である）
嫌いなもの…悪いこと

備考…平民出身だがその強力な治癒魔法を見込まれてソフィネット家に支援を受け魔法学校に入学する。

その異常なまでの回復力、広範囲の治癒魔法により怪我もスタミナも瞬時に回復してしまう。いくら倒そうと兵士は何度でも立ち上がる様は敵国から見ればまるで不死の軍団のようでひどく恐れられている。それ故に彼女が参加した戦は死傷者はほぼゼロとなる。それ

が白銀の魔女と呼ばれる所以である。銀髪なのはエルフの血をわずかながら引いてるため。

●ステータス

筋力…D

耐久…C

敏捷…B

魔力…SS-

戦闘技術…C

●魔力変換資質

火…124

E

水…6370

S+

土…235

E

風…340

D

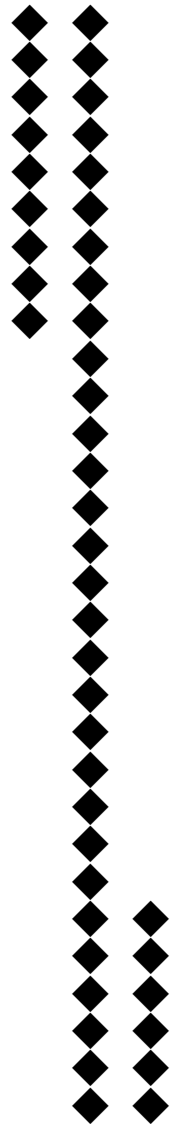
光…5309

S

闇…78

F

魔力…6589



名前…リフィア

種族…人間？

身分…名門ソフィネット家のメイド？

性別…女

年齢…？歳

誕生日…5月27日

身長…167・4cm

体重…？？？kg

容姿…黒髪、黒眼、高身長、スタイル抜群

性格…普段は優しいが黒い一面も、冷酷、百合

趣味…シーナを愛でること

特技…抹殺、殴殺、蹴殺、刺殺、薬殺

好きなもの…美少女（特にシーナ）

嫌いなもの…シーナに害をなすもの

備考…謎多き人物。普段のやさしい表情とは裏腹に、シーナに害をなす者は容赦をせず徹底的にいたぶる。

●ステータス

筋力…B+

耐久…B

敏捷…SS+

魔力…？

戦闘技術…SSS

●魔力変換資質

不明



設定があまり生かされていないところもあります。……すみません。

World Map 画像付き

>i29769—3822<

ランゴヴァルト王国..

森と草原で覆われていて自然豊かな国である。

人間とハーフエルフ、エルフの国。二つの自治区があり、一つはエルフの多く住むフェルデン自治区、もう一つは港を中心に商業の発達したジェノバ商業自治区。種族の内訳は人間、ハーフエルフ、エルフの順に多くなっている。

アルバニア共和国..

国土のほとんどを草原、一部を森林で覆われている。

獣人と人間の国で獣人と人間の人口はほぼ同じくらい。ランゴヴァルト王国とは友好的だが、獣人の弾圧をしているハザリヤ帝国とはあまり仲は良くない。

ハザリヤ帝国..

国土のほとんどは砂漠である。その国民は少数の人間と多数の獣人で構成される。

中央部にオアシスがあり発展しているが、それ以外は砂漠で覆われており人はあまり住んでいない。

主産業は魔晶石、鉱石の産出であり三大国の中で最も資源に富ん

だ国家である。その一方、高温・低湿の環境のために、少数の人間が悪環境でも生き抜ける獣人を強制的に鉱山で働かせ奴隷のように扱っている。

スバルの地…

この世界の人間は青髪、赤髪、緑髪など属性に合った色や種族ごとに決まった色の髪を持つが、黒色の人間はほとんどいない。その多くはこのスバルの地に住んでおり、黒髪・黒眼の者がほとんどである。

人口は少なく、一か所に集まらず各地に集落を形成しており独自の文化を持っている。また魔法資質が低くほとんどは魔法は使えないが、御神子と呼ばれる一部の者は強力な魔法を使えるという。

World Map 画像付き（後書き）

この地図書くのめんどくさかったです。

プロローグ? 「彼女との不思議な出会い」 (前書き)

この作品が処女作です。文章が非常に下手ですが、それでも気にしない方は読んでいってくださるとうれしいです。

プロローグ? 「彼女との不思議な出会い」

「君はだれ? 妖精さん?」

僕の目の前に立つのは流れるような淡い青色の長い髪と、水晶のように透き通った綺麗な青い目を持つ少女だった。整った顔、なめらかな白い肌、細身の身体、まるでおとぎ話に出てくる妖精のようだ。

「妖精じゃないよ。私はあなたのことはよく知ってる。そしてあなたも今は忘れてるけど、私のことを一番よく知っている」

「……? 知らないよ。名前は?」

知らない。だけど、彼女の姿はどことなく懐かしい感じがした。

「名前は秘密」

「なんで?」

「さあね」

「けち」

「そう………」

「どうしてそんなに悲しそうな顔をしているの？」

「ん？」

「ほら涙出てる」

「涙……？ あっ本当だ。わたし泣いてたんだ」

「何かあったの？」

「昔、ちょっと悲しいことあっただけ……。なんでもないよ……。だから悲しくなんか……。これで良かったんだ……」

悲しそうな表情をした彼女はもろく壊れそうなほど華奢で、けれどもどこか満足したような表情もしていた。彼女を見ているとまるで自分のことのように胸が締め付けられるような切ない気持ちになった。

「泣かないで。ほら、一緒に遊ぼう」

僕は彼女の悲しい顔を見たくなく、少女の手を引っ張り、必死に慰めようとする。

「……うん」

「じゃあ何する？ 鬼ごっこ？ かくれんぼ？ でも二人じゃつまんないか……。じゃあしりとりしよう。しりとり」

「うん……そうね。しりとりしましょう。……じゃあ私が初めでいい？」

「うん、お姉ちゃんが先でいいよ」

「……えつと、じゃあ……ハンバーグ」

「ぐ……、ぐ……グレープフルーツ」

「つ……。ツクの実」

「ツクの実？」

「あー知らないか……。甘酸っぱくて果汁が多い果物だ」

「知らないけどいいや……。じゃあ……みかん……。あつ……
ジュース」

「……。まあ良しとしよう」

「す……。す……。すいか」

「か……。か……」



「なんかお姉ちゃん食べ物ばかりだね。もしかして食いしん坊」

さん？」

「ちっちゃがう。……いや、君だってそうじゃないか」

「………………。……じゃあ次は何しようか」

「逃げた!？」

「ふふっ…………ふふ…………」

「ははっ…………はははっ」

「楽しいね」

「ああそうだな。こんなに笑ったの久しぶりだ」

「……………ありがとう」

「…………ん?何か言った?」

「いや、何でもない。さあ次は何して遊ぶか」

「サッカー!」

「いやそれは二人でできないだろ」

「そうだったね」

これは僕が幼いころ見た夢である。彼女はその後またびたび夢に出て、いつもは悲しそうな顔をしているけど、だれどこうやうてたまに笑ってくれる。

そして彼女のその笑顔が好きで、彼女との時間をいつも楽しみにしていた。

けれど年をとるにつれ、彼女はだんだん夢に出なくなった。結局彼女の名前は知ることではできなかった。けれど彼女と過ごした時間は今でもはつきり覚えている。

彼女は僕の初恋の相手だった。

プロローグ? 「別れそして再会」

僕は死んだ。

来月には高校入学を控えた中学生だった。

原因は両親の喧嘩のとばっちりだった。

僕の両親は仲が悪くいつも喧嘩していた。小さい時からずっとだ。その子供の僕は愛されておらず、疎まれていた。授業参観はもちろん親らしいことなんか一度もされたことがない。未だに離婚してなかったことが奇跡のようだ。

そんな家にいたくない小さい頃から僕は平日は夕方遅くまで、休日ほとんど祖父の家に遊びに行っていた。そして嫌なことがありそれに耐えられないのなら、何か没頭できるものを見つけてみてはと、祖父に勧められた剣道を祖父に稽古をつけてもらっていた。

その日父親はいつも夜遅く酔っぱらって来て、母親はそのことにうるさく注意していた。

父親は酔っぱらっていたせいかもしれないも以上に怒り出し暴力をふるい始めた。

悲鳴を上げる母親。

殺してやると叫ぶ父親。

二階で喧嘩している二人を止めるべく、急いで階段を上り父親から母親を引き離す。振り向くと母親は恐怖にひきつった顔で階段を慌てて下り一一〇当番した。

僕は母親に向かう怒りに狂った父親の前に立ちはだかった。

止めようも怒り狂った父親の力は強い。それでも必死に止める僕を父親は力任せに押し倒した。

階段のある方へ。

そして僕は新しい生活に希望を抱き、楽しんでいた高校入学を迎えることなく、三谷海斗としての人生を終えた。



闇の中を漂う意識。

ここがどこなのかわからない。どれだけ時間が経ったかも分らない。

何も感じることが出来ず、何にも聞こえない世界。

手や足を動かしてみるけど何にも手ごたえが無く、むしろ手足があるのかさえ疑わしかった。

ただそこに在るだけで何も感じない。

いやそもそも僕は存在していないのかもしれない。ただ僕の周りには何もない空間が広がっているだけ。何も感じないのだから暗闇とか空間というのは間違っているかもしれない。

ただ分かっているには僕は死んだということ。ここは死後の世界なのだろうか。何もないこの世界で永遠とただひたすらというのだろうか。

闇の中に何か違和感を感じたので周囲を探してみると、何か光っているのを見つける。

ふと何か存在を感じた。

それはなんだか懐かしい感じがした。

その感覚が何か気になった僕はそれへ近づこうとする。

何の感触も実感も感じないこの世界では近づいているか、それどころかそれが可能なのかわからなかったが、それへ近づこうと必死にもがく。

じわりじわりと意識が光に向かって近づいてゆくを感じた。

その光から感じるのはどこか懐かしい感じのするあたたかさ。

ずっと昔に感じたことがあるような……。そしてそれはとても大切な……。

そのあたたかさが何なのか、そしてこんなにも胸が締め付けられるのは何故か記憶の淵をたどる。

(!?)

……そうだ……思い出した。これは……あの少女だ。小さい頃夢の中であったあの悲しげな表情をした少女。

僕の初恋の相手。

小さい頃夢でよく会って、今では見なくなってしまっていた淡い青の髪と透き通った青の瞳をもつ女の子。

まさかここに彼女がいるのだろうか。

会いたい。

会って話をしたい。

あの子の笑顔を見たい。

その妙な感じするほうへ意識を集中させると、何かに引き寄せられる感じがした。それはだんだん強くなり、その少女の存在をより強く感じた。

その小さな光は一瞬弱くなったかと思うと、そこから大量の光が溢れ出し、視界全部を覆い僕を包み込む。

第一話「少女が目覚め？」

「うつ……。ううん……」

意識が目覚める。

……身体がうまく動かない。まるで、たったいまその身体に、長い年月の間伝わってなかった信号が伝わったかのように……。

……それにひんやりとした冷たさを感じる。水か何かに覆われているのだろうか。

重く閉じていた目を開き、周りを見渡す。すると、そこには見慣れない光景が広がっていた。

窓がなく、壁・床は石造りとなっていた。

そして、大きな古い本棚。それには本棚と同じく古く年代を感じさせる分厚い本がびっしり収まっていた。

だが、その本のタイトルには海斗が普段慣れ親しんだ日本語ではなく、外国語かと思ったが、英語、スペイン語、中国語、ハングル文字などとは全く異なった形をした、独特な感じのする文字が並んでいた。

この部屋で特に異彩を放っていたのは、金属か石かわからない

が未知の物体。台形型をした文字の彫りこまれた物体。それは自分のいる位置を中心に並び、中心から離れるほどそれは高く大きくなっていた。半径およそ5メートルほど。

そして自分は宙に浮かんだ水？でできた球体の中に入っていた。

朦朧とした意識もだいぶはつきりしてくる。（ここはどこだ？
懐かしいような何かに包まれた感覚。ぼくはどうなったんだ？）

（たしか……僕は階段から落ちて……そして……死んだはず）

（そしたら何もない真っ暗な世界に……。そしたらあの子がいる
ような気がして……。それから……。光に包まれた？）

（何がどうなってるかわかんないけど、どうにかこの球体から
でないと……）

（んんん）

そっと手を延ばして球体の外に出そうと試みる。あとちょっと。
あと10センチくらい。

（んー。んんん。わっ！！）

バシユッ！

手が球体の外に出た瞬間、その水の球体ははじけ散る。

(うっ息が！)

「ごぼっ！げほっうおええー」

せき込む。どうやら肺の中まで水が入っていたようだ。

「……出れ……たっ！！」

思はず喜びの声をあげる。だがどこか違和感を感じる。何かおかしい。

「何が……？……っ！？」

おかしい。声がやけに高いような……。

「あー。あー」

明らかに声が高い。確かに僕は男としては声は高い方だったが、これではまるで女の子のように高い。おかしい。

「なん……でだ？」

やはり声が変わってる。なぜだ……？

それにここはどこなんだ？床に刻まれた奇妙な模様……古びた机……本棚……。

「……っ！？」

今窓の外にだれかいたような。しかもどこか見覚えがあるような……。

恐る恐るさっき見た方を見ると……。

「……………っっ!？」

まっまさか。あのときの……夢の……？

そこにいたのは小さい頃夢の中で会ったあの少女だった。

「また……会え……た」

また会えたのである。やっと……やっと……、僕の初恋の人に。

と、そこで少女が裸であることに気づく。

「ごっごめんっ! みっ見てないからっ! 見てない。見てない」

故意ではないが、女の子の裸を見てしまったのは悪いと思い、目を閉じ必死に謝る。

「……………ん?」

が、いつまで待っても少女の返事は聞こえてこない。

「あれっ？」

ゆっくりと閉じていた目を開く。すると鏡の中の少女は、その美しく整った顔を僕のほうに向けたまま立っていた。

「ご、ごめんっ！」

素早く後ろを向く。が、何か違和感を感じる。今度は何だ？

再び前を向き、鏡を覗き込む。

そしてふと気付く。

絶対ありえないことに。自分が手を動かせば、少女も同じように手を動かし、口を開けば、また同じく少女も口を開く。その少女が自分と全く同じ動きをしていた。

それは少女が窓の向こうにいるのではなく大きな鏡に映っている姿だと気づく。

つまり……。

「えっ！？ なん……で……」

信じられない。それはどうやら自分の姿のようだ。

十五年間つきあってきた、特にこれといった特徴もない平凡な姿とは、似ても似つかない姿の女の子だった。それも思はず見とれてしまうほどの容姿を持った可憐な少女だった。

そこに映るのは、流れるような艶かな長く青い髪。水晶のように透き通る青い瞳。薄桃色の唇。陶器のようになめらかな白い肌。そしてひかえめだが確かに存在する二つのふくらみ。腰にかけて流れる緩やかなライン。

どこからどう見ようと、少女の姿だった。しかも何も見に着けておらず、生まれたままの姿で。

「……………本当に……………」

そっと自分の手をその二つの膨らみへと延ばしていく。

もにゅ。

「っ!!」

……………。

生れてから十五年間。はじめて体感するやわらかな感触。まるでマシユマロのようにやわらかく心地よい感触……………。

「はっ!?!」

女の子になんてことを…………。あれ? 僕は男の子であって、ぼくが女の子に…………。いや、僕は女の子で、男の子ではなく…………。男。女。男。女。男。女。男。女。…………。ひどく混乱してきた。

「本当に……。そんなことが……。……ん!？」

そこでさっきの違和感の正体二も気づく。男としてやけに高いこの声。まさしく女の子の声そのものだった。

これで僕の体は女の子になってしまっていることをはっきりと自覚する。

わからない。

わからない。わからない。たしかに自分は女の子の体になっている。

しかも夢で出あった初恋の相手に。

そんなことあるわけがない。

……………。

そう思ってもちゃんと実感がありこれは夢ではなく、紛れもなく現実であった。

第二話「少女の目覚め？」

「どうして……………」

「……………」

僕は……………。

カタッ。

「…………？」

後ろから響く物音。だれかいるのだろうか？

「何故…………お前が…………生きている？」

若い女の声。しかしそれはひどく冷淡で低く心の底から憎しみのこもったような声。

まるで長年憎み続けてきた仇に対するようなその声は僕を震えあがらせる。

「だっ…………だれ？」

「なぜだっ！なぜお前は生きているっ？」

「なんの……ことだか……」

「お前は……三年前に死んだはずだ……」

死んだ……？僕が死んでから三年経ったということか？向こうは僕を知っているようだけど、僕はその顔に見覚えがない。

「君はだれ……？」

「っ！？ふざけるなっ！お前は私を覚えてないというのか？お前らのせいでっ！……私の……母さんと……父さんはっ！お前たちのしてきたことは許さない」

「なっ何を言って……」

「いやっそもそもお前が生きてるはずがない。確かに私は心臓を貫いたはずだ。いくら高度の回復魔法を使える者でもあれを治療するのは不可能のはずだ」

「しんぞう……？……つらぬいた……？」

僕は車に轢かれて死んだはず。この人は何をいつてるんだ？そもそも僕は何で生きている？しかもこの体は……。

「……まあ、いい。生きているのならまた殺せばいい。おまえらソフィネット家は許さない」

「シーナ・ソフィネットお前は再び私が殺すっ!!」

すると女は瞬時に何か光るものを取り出すと、一瞬にして五メートルほどあった僕との間を詰める。僕へ向けられる深く純粹な殺気。

女の手にしてるのはナイフだった。そしてその鋭利な刃物は何のためらいもなく僕へまっすぐ向かってくる。

僕は咄嗟に横に跳び回避を試みる。

「……くっ！」

痛い。どうやら避けきれず右足にナイフが掠ったようだ。切り傷から血が流れ出る。

怖い。怖い。なんで僕が？

さつきは避けたけど次も避けれる自身がない。身体が震えて言うことを聞かない。

[illegible]

「ひいつ！」

このままナイフは僕を刺し、そして僕はこの少女に殺されるの
だろう。

.....。

.....。

.....あれ？.....痛く.....ない？

「くっお前はっー」

閉じていた目を開くとそこに広がっていたには、謎の男（仮面で顔はわからない）が素手で日本の指で挟むようにしてナイフを止めている光景だった。

「ラクタムっ!？」

「.....」

「なぜ.....お前が.....」

「.....去れ.....。お前では俺に相手にならない.....」

すると男の周りの雰囲気を変容する。感じるは圧倒的な力の差と敵意。

「.....」

少女は相手の力量を量るかのようにこちらを睨み続ける。

「相手が悪すぎるか……」

少女はも男には敵わないと悟ったのか、悔しそうな顔をしながらも立ち去って行く。

「たす……かつ……た」

一体なんだったんだろうか？彼女に言うことは全く身に覚えがないし……。それに謎の男。さっきは助けてくれたが、素手でナイフを止めたり尋常でない殺気を放っていた。

「あっあの……。さっき……は……。ふぐっ!？」

何の気配もなしに突然後ろから口をふさがれる。

「っっ!？ はっ……はなっ……せ……」

こいつも敵なのか？僕をどうするつもりだ？

「動くな！静かにしろ……」

「ふぐっ……ふぐぐっ!」

「……ほかの奴らに気づかれる」

「ふがっ……ん、まっ待て何がどう……なって……」

「しょうがない……」

「…………ふぐぐつ……………ふぐつ」

男は杖のようなものを取り出すと小さく呪文のようなものを唱える。

「…………ふぐつ?……………」

男が何か唱えたかと思うと急に襲いかかる激しい眠気。その眠気には耐えきらず瞼はだんだん重くなっていく。

「……………」

「…………転送魔術を発動する。お前はそれで逃げろ…………精霊よ…………力を…………」

僕の下には見知らぬ文字が円状に並び円や直線でできたその模様は広がり光を放っている。

後ろを振り向くと、男はどこか悲しそうな顔をしていた。

…………この男とはいつか会ったことがあるような気がする。ずっと前に……。しかし思い出そうとすると頭に中に靄がかかって思い出すことができない……………。

そして、激しい眠気に耐えられずその目蓋を閉じる。

「シーナ……………」

男が小さく呟いたその名は海斗の耳には届かなかった。

「…………ディメンション…………ゲート……………」



「んっ…………うん……………」

意識が戻る。どうやら気を失っていたようだ。

日は沈み、辺りはほとんど何も見えない。静かで音が何も聞こえず、足元はぬかるんでおり、薄気味悪い。手で辺りを触れながら進んでいく。するとここは鬱蒼とした木々が広がり、そして自分はその中にただ一人とり残されていることが分かる。

「さっきの男は……」

あの男はどうなったんだろう。それにさっきまで建物の中にいたのに、今自分は森の中にいる。

「……………?」

ふと、さっきまで素っ裸だった自分が厚いコートを羽織っていることに気づく。

「さっきの男の……? 何がどうなっているんだ? それにここはどこなんだ? 森の中のようにだけど……」

日が沈んだとはいえ、目が暗闇に慣れてきたのもあるが、月明かりのおかげででかすかに見える。

「月明かり……………」

満月だとしても月明かりにしてはちょっと明るすぎる。上方を向くと……、そこには二つの月があった。二つの月が。片方は赤色もう片方は青色の。

「なっ……………何で!?!」

「……………。どうなって……………いるの……………?」

わからない。ここはどこなのか。何が起きたのか。自分はどんなってしまったのか。

寒い。

体の震えが止まらない。流石にコート一枚では寒くて凍え死にそうだ。それに夜の森は危険である。早く森から出たほうがいいだろう。

歩く。

途方もなく歩く。ひたすら前へ。

だが、いくら歩けども木、木、木、木。ただひたすら木に囲まれていた。全身に擦り傷を作り、先ほど女に受けた傷もあり、疲れは限界に達していた。

グサッ。

足の裏に鋭い痛みが走る。その痛みでバランスを崩し、正面からぶっ倒れる。

「つつ——。……………痛い……」

何か尖ったものを思い切り踏んだようだ。

それもけっこう深く刺さったようで、かなりの量の血が流れ出ている。もう起きる気力もせず、意識も朦朧としてきた。

バタッ

そして正面から倒れ、再び意識を失う。



遠くからだんだん大きくなる馬車の音と若い二人の女性の声。

「あれは……」

「エリスお嬢様どうかありませんでしたか？」

「いま森のほう人影が見えたような……。気のせいかしら」

「森のほうですか？ たしかに何か……。ひ、ひとが倒れます！」

「リフィア！ 馬車を止めなさい！」

「は、はい！ 様子を見てきます」

二人を乗せた馬車はとまり、中からメイド姿の女性と、見ためは十歳ほどの少女が慌てた様子で出てきて森へ近づく。

「そこに誰がいるの？」

「お嬢様危ないですから私が先に行きます。もしものこともあり
ますしエリス様は後ろに」

メイドの恰好をした女性は手にはナイフを忍ばせ、少女は後ろ
に隠れ、恐る恐る倒れている人に近づいていく。

「あの、そこの方、どうかなさいましたか？どこかお怪我で
も？」

メイドは全身擦り傷を負い、うつ伏せに倒れている人を起こさ
せる。

「あ、あなたは！？お嬢様っ！」

「リフィア？どうしたの？ その人だいじょう……ぶ？ えっ
？ な、なん……で！？」

その倒れている人物の顔に気付くと、少女の顔に浮かぶのは驚
愕に満ちた表情。

少女はすぐに我に返ってその人物を抱きしめる。

「起きてっ！起きてっば……。シ……。ナお……。ちゃっ……。ん
ーーーー！！」

朦朧とした意識の中、どこか懐かしい、聞いていると胸の
温まるような、そんな声を聞こえたような気がした。そして、意識
は再び深い闇の中に落ちて行った。

第三話「第二の家族？」

「ううーん……。……………ん……。んっ??」

目を開ける。

装飾が施された天井、見慣れない窓、壁、そして天蓋つきのベッド。

ここはどこなのだろうか？少なくとも僕の部屋ではない。やたらと凝った装飾といい、天蓋付きのベッドといい、これじゃまるで中世の貴族の使う豪邸のようだ。

「僕は……」

状況を把握すべく記憶をたどるが、目の前のこの状況が何なのか全くわからない。

（たしか……。女に襲われて……。いつの間にか森にいて、そして怪我をして倒れて……）

（それから……。んー……。だめだ。思い出せない。でも……。なんか聞き覚えのある声を聞いたような……）

「僕はどうなったんだ？ここはどこだ？」

ガチャ。

ドアが開く。すると――。

「おねえちややああああああ――ん！！」

どどどどっ……だきっ。

ぎゅっ。

知らない女の子か部屋入ってきたと思ったら、僕に気づくとすさまじい速さでこちらへ走って来て、そして抱きつかれる。

「う、うわっ」

「お姉ちゃんっ！シーナお姉ちゃんっ！本当に本当のシーナお姉ちゃんだよね！」

いきなりかわいい女の子に抱きつかれ、かるくパニくる。きつと頬は熟したリングのように真っ赤っかになっていることだろう。

「お姉ちゃんっ！会いたかった！ずっと会いたかったんだからねっ」

少女はより強く僕を抱きつく。うつっ……ちよつと苦しい……。

「ちよつ、ちよつと待って！苦しい……。離してお願い」

「どうしたの？お姉ちゃん？」

少女は抱きつく力を弱めるが、まだ抱きついたままだ。

「君はだれ？」

「？」

「お姉ちゃん私のこと忘れちゃったの？」

「いや、多分人違いだから」

僕は少なくともこんなかわいい女の子には見覚えがないし、それにぼくに妹はいない。仮にそうだとしてもお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんだ。

「んー人違い？そんなはずないよ。わたしがお姉ちゃんを見間違えるはずないよ。それにこのサラサラの髪、この匂い、抱き心地は間違えなくシーナお姉ちゃんだよ」

「僕は三谷海人だ。シーナじゃない」

「僕？何言ってるの？シーナお姉ちゃんはシーナお姉ちゃんだよ。間違いないわたしのお姉ちゃんのシーナ・ウィンドル・ソフィネットだよ」

「だから違うって。それに僕は女の子じゃない。列記とした男だ」

「何言ってるの？お姉ちゃんは女の子だよ。誰がどう見ても男の子何かには見えないよ。ほらっ鏡」

その鏡に映るのは十歳？くらいの可憐な少女。

.....。

.....思い出した。

そう、僕は女の子になったのだった。小さい頃夢の中で会ったあの女の子。

僕の初恋の相手に。

「ほら、どこからどう見てもかわいい女の子。わたしの大好きなお姉ちゃん」

「……………」

ガチャ。

ドアの音がすると同時にメイド服を着た若い女性が部屋に入ってきて来る。

「お嬢様どうかなさいました？何やら騒がしいようですが」

「リフィア！ちょうどいいところに来たわ。おねえちゃんが起きたんだけど、なんだか様子がおかしいの」

「様子がおかしいといえますと？」

「シーナおねえちゃんじゃないとか、男だとか、何だかよく分かんないこと言ってるの」

「でも、間違えなくシーナお嬢様にしか見えませんが……………。確かに最後にお会いになったときからあまり成長してように見えませんが」

「だから違うって」

二人は僕の話に全く聞く耳を持たない。

「わたしもそう思ってたのよ。あれから三年も経ったのに、私より身長高かったのに、今じゃほとんど同じくらいだし……………。でもどうみてもシーナお姉さまに見えないでしょ」

「たしかにそうですわよね。…………ちよつと記憶が混乱しているでしょうか？…………あつ！そうでした。お嬢様、シーナお嬢様の杖でお確かめになれば、はっきりするのでは？」

「だから……、僕は今そのシーナていう女の子だけど本当は違うの」

「…………あつ！…………そうね。あれは決して本人以外には反応しない。所有者の姿かたちではなく、魂の波動を記憶していてそれに反応するから、所有者のシーナお姉ちゃん以外には絶対使用できないはず。リフィア、持ってきて」

「はい、お嬢様、わかりました。今、お持ちします」

リフィアというメイドの姿をした女性は部屋から出て行くと、二、三分後、なぜか宝石のようなものが収まったブレスレットを手に持ち帰ってきた。

「これがシーナお嬢様の杖です」

「……懐かしい……。シーナお姉ちゃんの……。……」

「それが杖？ ただのブレスレットにしか見えないけど……」

「それはまだ顕現してないからよ。さあお姉さま、それを利き手につけて、意識を集中して魔力を込めて。そうすれば杖が反応するから」

魔力？ 魔法が使えるってことか。僕はただの平凡な中学生で……そんなものは……

「なんだかよくわかんないけど、そうすれば僕は君のお姉さんのシーナ・ウィンドル・ソフィネットじゃないと証明されるんだな」

「反応しなければね。でもお姉ちゃんはシーナお姉ちゃんなんだから反応するはずよ」

言われた通りブレスレットを僕の利き手、左手につける。そうすると、体の奥底を不思議な力で満ちているような、何だか懐かしいような感覚がする。

「まさかな……」

これが魔力というやつか？ 仮にそうだとしても身体はシーナという少女のものでも、魂？ は僕だし……。

「早く。お姉ちゃん」

「わかったよ……。意識を集中して……集中……」
なんだかさっきよりこの妙な感じが強くなってる？

「魔力を感じたらブレスレットに集まるようイメージして」

ブレスレットに………。

さっきの感覚を高めて一か所に集めて、それを左手にはめたブレスレットのほうへ………。

すると一瞬ブレスレットが光ったかと思うと、左手にずしりと重みを感じる。

「ん？ ……えっ!？」

ブレスレットは違う重み。しかも自分の身長の三分の二ほどの長さを持つ金属製の細長い棒状の物があった。

そして上のはうには大きな青い宝石がはめ込まれ、その周りに

は小さな同じく青い宝石がちりばめられ、金属？の部分に紋様が刻み込まれていた。

その宝石は独特だが人を魅了する美しい光り方をしていた。信じられないがエリスという少女の言っていた杖なんだろう。

「ほら、やっぱり反応したわ。これであなたはわたしのお姉ちゃん、シーナ・ソフィネットとに間違いない。そうでしょリフィア」

「はい、そうです。お譲さま。杖は所有者にしか出すことはできません。すなはちあなたはソフィネット家の長女シーナ・ウィンドル・ソフィネット本人です」

そっそんなはずは……。この体は夢であつたあの少女のものはず。僕が本当にシーナという少女なのか……？

じゃあ三谷海人として記憶は何なんだ？この記憶は間違っているのか？

僕は誰なんだ？

「そんな、ぼくは……。僕は三谷海人……。こんな杖知らない……………」

「杖が出現した以上、あなたは私のご主人さまシーナお嬢様に間違いありません」

「そうだよ。お姉ちゃん。きっと記憶ちよつとが混乱してるだけだよ」

「だから……………だから……。お姉ちゃんだよ。それとも……わたしのこと忘れちゃったの……………？……………うぐっ……………」

少女は再び僕に強く抱きついてくる。少女のその天使のような可憐な顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら。

強く抱きつく。涙で濡らしたとても悲しそ顔を向けて、ギュッと手で掴み……………。

既視感。

ずっと昔同じように誰かにこんな風に泣きながら抱きつかれたような……………。

「せつかくまた会えたのに……………。……………うぐっ……………。あのとき死んじゃったと思って……………でも……………生きてるとわかって……………、だから……………うぐっ……………」

「うっ……………」

泣いちゃだめだ。

泣いている所なんか見たくない。

またあの天使のような笑顔を見せてほしい。

こんなに悲しんではいけない。この子は笑顔でいなくてはならない。

苦しい。胸がぎゅっと締め付けられる。

またこの子を悲しましたくない。

……お願いだ……

「……………泣いちゃだめだ。……エ…………リス…………」

「……………えっ…………今…………わたしの…………」

エリス？エリスって誰のことだ？この子の名前なのか？なら僕がそれを知っている？どうして……………。

「お姉ちゃっんっ！私の名前覚えててくれた。忘れてなかった。……………うれしいっ」

「…………君の名前？」

「そうだよ。私の名前。シーナお姉ちゃんの妹のエリス・ウインドル・ソフィネットだよ。お姉ちゃん」

「ちっ違う。知っていたんじゃない。さっきリファイって言う人がそう呼んでいたんだ」

「いえ、私は一度もエリスお嬢様のお名前を言っておりませんが」

「そんなはずは……………」

「好き。大好きお姉ちゃん……。会いたかった。ずっと……。今はちよつと忘れちゃってるかもしれないけど、いつかきつと思いで出してくれる……」

「僕は……………」

わからない。だが、この少女のことは知っている気がする。それに彼女を見ていると胸の締め付けられ涙が出そうになる。

まるで、ずっと会いたかった大切な人に再び出会えたような。

第三話「第二の家族？」（後書き）

なんかだんだん話が進むごとに文字数が多くなってるような……。予定としては2000～3000文字ぐらいで週に1，2回ぐらい更新していくつもりです。夏休みはもっと多くなるかも。

文章が下手ですが今後も読んでもらおうと嬉しいです。

第四話「第二の家族？」

「……………うぐっ……………。……………お姉ちゃあぁん……………」

どうして……………。

どうして僕はこの子の名前を知っているのだろうか……………？

どうしてこの子を見ると切なくて、そして心の底から嬉しきで満たされるのだろうか……………？

「……………お姉ちゃん……………泣いてるの……………？」

「えっ？」

涙。

あれ？泣いてる。

どうしてだろう？

今日会うのが初めてのはずなのに。

二度とこの子、エリスを手放したくない。そんな気持ちになるのはなんでだろう……？

わからない。けど……。

「エ……リスっ……」

ぎゅっ

抱きしめる。この子を二度と手放さないように。

「……お姉ちゃん……いたいよ……」

「……だめ。離さない……。もうエリスを一人にしたくない……」

「お姉……ちゃん……うぐっ……。エリスは……もう一人は……いや。お姉ちゃんのいない生活には耐えられない……」

「……うん、わかった」

「……これからはずっと二人一緒だ……」



「僕は三谷海斗という中学性……のはずです」

あの後しばらく抱き合い、涙が枯れるまで泣き合い、夜遅いのでエリスを寝かした後……。

僕はリフィアさんに事情を全て話した。僕がシーナではなく三谷海斗という少年であることも。

「つまりシーナお嬢様としての記憶はなく、ミタニ……カイト……としての記憶をもっている」と

「はい……」

「でも、エリスお嬢様のお名前を覚えていらっしやいました」

「それが僕にもわからなくて……。なんかエリスを見てたら切なくなってきた……。胸が締め付けられるような気持ちになって……。、もしたら……」

「エリスお嬢様の名前を思い出した？」

「……はい」

「やっぱりあなたはシーナお嬢様本人に間違いないと思います。さきほど試していただいた杖の方もちゃんと反応しましたから」

「本当に本人以外には出せないのですか？ あれは」

「間違いありません」

「……そうか……。僕が誰なのか何者なのかまだよくわからないけど……。はつきりしていることはひとつあります」

「それは？」

「僕はエリスといっしょにいたいことです。もう離れたくなんかありません。この想いだけは何があっても本当のものだと思います」

「そう……ですか。私の知っているシーナお嬢様もとてもエリスお嬢様を大切にしております」

「お嬢様」

「はい？」

「傷のほうはどうでしょうか？ 治療術も施しましたし、そろそろ包帯をとってもいい頃だと思います」

「あっそうですか。……本当だ。あんなに大きな怪我だったのに、

全然痛くない」

僕は今、包帯を巻いた上に寝間着、ネグリジェ？を切着ている。正直女の子の恰好はものすごく恥ずかしい……。しかもピンクのひらひらの付いたかわいいやつだ。

「……こんな服……恥ずかしい」

「今お嬢様が着ているのはエリスお嬢様のものです。本来なら三つ年が離れてるですが、お嬢様はあれからお姿に変わらないようで、サイズもだいたい合ってるようでしたから」

「えっ？」

「お嬢様の服は長い間使ってなく着るには洗濯しないとイケないですが、間に合わないのでエリスお嬢様のをお借りしました」

「これエリスの……。……いくら妹のでも恥ずかしいよ。僕は体女の子でも心は男だし……」

さっきは突然抱きつかれて驚いていて、気付かなかったがエリスはかなりの美少女なのだ。どこまでも透き通っていて、穢れを知らない純粋な子供のような目、薄桃色の小さい口、あどけない愛くるしい笑顔。それに青い目、淡い青色の目は初恋の少女と同じだった。

「大丈夫です。とても似合っていてかわいいですよ。私でも思わず見とれてしまいそうです」

「ううう……………」

かっ……かわいいって……、

恥ずかしすぎるっ。男の子なのにかわいいって言われるなんてっ。

「リフィアさんのほうが、美人でかわいいじゃないですか」

漆黒の瞳、肩までかかる艶やかな黒い髪。完璧なまでに配置され整った顔のパーツ。

胸には大きな膨らみがあり、そこから腰にかけての魅力的な曲線。黒い髪、漆黒の瞳は日本人に似ているが、鼻はすっと高く、陶器のように白い肌、スタイルの良さ、どれをとっても美しいとしか言いようがなかった。

「そっそんなことないですよ……。私なんかよりもシーナお嬢様のほうが……。それに以前のお嬢様よりも表情が豊かで可憐で……」
彼女はぽつと頬を赤らめる。

「うっううう……………」

やっぱりすごく恥かしい……。

「私だって……」

ぎゅっ。

彼女は僕を引き寄せ抱きしめる。
震えてる。

「わっ、リ……リフィアさん？」

「私だって……シーナちゃんが生きて嬉しかったんだから……」
どこか懐かしいぬくもり。彼女に抱きしめてもらっているとんだ
か落ち着く。

だけど……、この体は十歳程度で身長が低いため、彼女が僕を抱
きしめると、僕は必然と彼女の豊満な胸に顔をうずめることになる。

「う……。はっ……はづかしいです……」

「……？ あっごめんね……。ちょっと苦しかった？ シーナちゃんと
こうしてまた会えてうれしかったから……。つい……」

彼女の抱きしめる力が弱まる。

「リ……リフィアさん……」

「リフィア……。私のことはリフィアって読んでください」

「で、でも……」

「呼び捨てでいいのよ。昔のシーナちゃんもそう呼んでくれました
し……」

「年上の人を呼び捨てにするのは……ちょっと……」

「気になさらないでください。私はそのほうが落ち着きますし、それに私はメイドですから……」

「……うん、わかったよ……。……り……。ファイア……」

「はい」

「やっぱり、恥ずかしいです……。……」

「それなら……。今すぐでなくてもいいですよ。私はシーナちゃんと一緒にいられればそれで……」

「……うん、わかった」

「……なんか幸せだ……」。

今まで親に大切にされたことはなく、自分が必要とされてなかった。でもこの二人は僕をこんなに大切にし、喜んでくれたり、悲しんでくれる。

「幸せだ……。……」

第五話「第二の家族？」

僕がシーナ・ウィンドル・ソフィネットとして目覚め、ソフィネット家に保護された次の日。

あれだけひどかった怪我も完治し、平穏な日々が訪れるかと思われたが、今、僕はいまだかつて経験したことのない危機に直面していた。

「やだぁー」

「シーナお嬢様逃げないでください」

「いやだっ。それだけは……」

「駄目です。このまま不清潔でいるおつもりですか？ 怪我も完治しましたし、もうお入りになっても問題ありません」

「お風呂なんて入りたくない」

そう、お風呂である。目覚めてすぐにリフィアさんが寝ぼけたままの僕を連れてきたのは、浴場である。ホテルの浴場よりも大きくて豪勢で、いつもなら風呂好きの僕にとってはそれは嬉しいことのはずなのだが……。

一つ問題があるのである。

それは今僕は男の子ではなく、かわいい女の子の体なのである。
しかも初恋の少女のである。

今僕はそのシーナという少女なのだが、心は男の僕には恥ずかしい以外のなんでもない。

それと女の子の裸を見ってしまうという罪悪感。

「だからっ……。僕は男の子であって……。その……。裸を見てしまうのは……」

「そうかもしれませんが、仮に今入らなくてもいずれは乗り越えなくてはならないのですから……。それに今日は旦那様と奥様にお会いしなければならいのですから、清潔にしないではいけません」

「ううううだっ……」

「さあ、入りますよ」

そういつてリフィアさんは僕のネグリジェを脱がし始める。

「ひゃあ」

つい女の子のようなかわいい声が出てしまう。

「恥ずかしがる必要はありませんよ。お嬢様はだれもが認める美少女ですから」

ついに全て脱がされてしまう。そして……。

「うう……」

前には全身を映せるほどの大きさの鏡。

そしてそこに映るのは……素っ裸の少女……。

初恋の少女の、今は僕の……裸。

絹のような白い肌、胸元の小さな膨らみには、先っぽにわずかに
つんと小さな突起物。腰にかけての緩やかな曲線。

裸を見るのはこれで二度目だがこの衝撃には慣れない。
頬が熱い。おそらく真っ赤っかになっているだろう。

「さあ……」

「うっうん……」

なんかリフィアさんも頬が少し赤くなっているような……。体調で
も悪いのかな……。

ガラガラガラ。

開かれる浴場への扉。

なるべく体を見ないようにしてさっさと洗って出よう。こんな
いつまでも見てたら悶え死んじゃうよ。……うん、そうしよう。

「見ないように……、見ないように……」
浴場に入る僕。

ガラガラガラ。

閉じられる扉。

そして浴場に入ってくるリフィアさん。

「えっ!？」

「なんでリフィアさんも入ってくるの？」

「なんでって……。お嬢様のお身体を洗うのはメイドである私の役目ですが……。ふふ」

「じっ自分でやりますから。大丈夫です」

「そういうわけにもいきませんから……。ふふふっ」

「リフィアさん？なんか目が怖いよ……」

「ひゃあ」

「三年ぶりの……。シーナお嬢様の……。はあはあ」

ぶるぶる。

なんかリフィアの目つきがまるで獲物を見つけた獣のような目に……。。

「……なんか性格変わってない？」
なんか僕の貞操の危機？

「さあ早く……洗いましょうお嬢様。……………じゅるり」

「きゃあああー」

「さあ……さあ……」
ぶるぶるがくがく。

「ひゃあつ。……そんなところ……さわら……ないで……」

「お嬢様のすべすべの肌……」

この後リフィアさんに体中あちこち触られたりして思う存分弄ばれることに……。



「うう……………。リフィアさんがあんな人だったなんて思わなかったよ……」

「私はただお身体をお洗いしただけですが」

「あちこち触ってきたし……」

「洗うには触らないといけないと思いますが」

「白を切る気？」

「なんのことでしょう？」

「僕を弄んだくせに……」

「……………。……あんなにかわいいお嬢様がいけないのです。以前より増して……」

「リフィアさんて前からあんなふうだったの？」

「いいえ……。私もあんなことは初めてです。お嬢様があまりにもかわいくて……。自分じゃ溢れる衝動抑えられなくなって……。つい」
普段冷静で優しいリフィアさんがあんなふう……。――

「どうやら新たな自分を見つけてしまったようです」

「見つけなくていいよ……………」

リフィアさんはやさしいけど、またあんなことがあるかもしれないと思うと……。

「はあ……」

「この後お嬢様のご両親とお会いになります」

「わかってるよ……」

僕はこれから僕の両親に合わないといけないのだ。

自分の親であり、好きな人の親でもある。複雑な気分だ。

スタスタスタスタ。

スタスタスタスタスタ。

「このドアの向こうに奥様と旦那様がいらっしゃいます」

「僕は以前のシーナじゃないけど……大丈夫かな……」

僕はシーナであってシーナではない。

エリスとリフィアは受け入れてくれたけど、両親もこの僕を受け入れてくれるとは限らない。

僕自身よく自分のことをとくわかっていない。

「奥様と旦那様にもちゃんと事情をお話ししてありますから……。
それにあのお二人ならきっと大丈夫ですよ」

「うっうん……」

ガチャッ。

部屋の中にいたのは、銀髪の若くて綺麗な女性と白髪交じり青髪のガタイのいい男性。

銀髪の女性が母親だろうか……、かなり若く見える。とても二児の母親には見えない。むしろ姉だといわれた方が納得できる。

男性の方は背筋を伸ばして、貫禄のある表情をし座っている様は威厳があり圧倒される。

「おっ……おはようございます」

「シーナちゃああゝんっ」

どどどどっ……だきっ、ぎゅう……。

つい最近これと同じ光景を見たような気がする。気のせいだろうか？ いや、気のせいではない。どうやらエリスは母親に似たんだな……。

「シーナちゃんっ、シーナちゃん」

「生きておったか……。シーナよ……」

「……お母さん……。？ お父さん……。？」

「そうよ……私があなたの母親であの人が父親よ。あれでも人一倍あなたのこと心配してたのよ。あのとき以来まるで魂抜かれたかのように元気なくて……。毎晩シーナ、シーナて寝言言ってたわ」

「なっつ、何を言う、シルヴィア」

「本当のことじゃない」

「そんなことはないっ。……………シーナ……………心配をかけるな」
そういうと父親はすぐ後ろを向いてしまう。
震えてる。もしかして泣いているのだろうか？

「素直じゃないんだから……………。……………シーナちゃん……………、うっ……………」

みんな僕のことを受け入れてくれる。シーナもリフィアもお父さん、お母さんもみんな……………。

「……………うう……………ぐすん……………」

なんか最近泣いてばかりだ。僕ってこんなに涙もろかったっけ？

家族がこんなに温かくて優しいものなんて知らなかった。
このぬくもりをもう二度と手放したくない……………。

第五話「第二の家族？」（後書き）

リフィアさんが大変なことに……。

初恋の少女の体を手に入れてしまった少年海斗。初めて知る家族の温かさ。はたしてこの後彼はどうするのか……。

次回もよろしくお願いします。

第六話「守るための力？」（前書き）

今回長めです。

第六話「守るための力？」

あれから一カ月。

ちなみにこの世界では体感時間で一日30時間くらい。一カ月28日で一年12カ月で僕がいた世界とはちょっと違う。それで一年で336日、10080時間で前の世界の365日、8760時間より長いのである。

だが不思議なことに、この世界と記憶上の前の世界の同じ年齢ぐらいの人を比べるとなんら見た目が変わりがないように見える。なので僕の10歳の見た目は前の世界の10歳のものと同じくらいである。

で……それはそれとして僕は今、魔術書を読みふけている。

リフィアさんに貴族としての（または淑女としての……）礼儀、作法などを教わる傍ら空いた時間にはひたすら魔術書を読みふけり、すでに与えられた魔術書の9割ほどは暗記してしまっている。

魔術書は日本語ではなく、スクリット語という異世界の言葉なのだが、なぜか僕にはそれが読めてしまう（話し言葉も同様）。エリスの名前といい、言葉といい、本当に僕はシーナであるというのだろうか……？

なぜそこまでするのか、それはエリスや母さんや父さん大切な家族を守るためだ。

どうやら僕、シーナは三年前に魔法学校へ馬車で向かう途中賊に襲われ死んだことになっていたらしい。いっしょにいたエリスは侍女達の手によって命からがら逃げて助かったらしいが、僕はエリスを守るため賊の前に立ちほだかり致命傷を負い、後日捜索隊を出しても見つからず死んだと思われるらしい。

そのおかげエリスは助かったが、たくさんの侍女や護衛の騎士の犠牲を出してしまったらしい。

次また同じようなことがあったら今度はエリスは助からないかもしれない。だから僕はエリスやみんなを守るために魔法を勉強することを決心した。

通常魔法は12歳で魔法学校に入り、そこで初めて教わるものらしい。今僕は本来、体はだいたい13歳のはずなのだが、なぜかあの事件のままの姿、10歳程度の体なのである。

成長しきっていない未熟な身体、精神力では魔力が暴走する危険があるため、両親には止められたがエリスを守るための力が欲しいこと、今の僕の精神年齢は15歳であることを考慮して、なんとか許可を得ることができた。一ヶ月間礼儀、作法をきちんと学び、ものにすることを条件として。

そして今日、待ちに望んだその日である。そう、先生はなんと優秀な魔法を学ぶことができるのである。先生はなんと優秀な魔

術師でもある母さん自身が教えてくれるとのこと。

ところが約束の時間になっても一向に来るようすがない。どうしたのだろうか？

直前になって反対されてしまうのだろうか……？
もし反対されてしまったらどうしよう……。

エリスを守るには……………。

するとこちらの広場に向かって息を切らしながら走って母親の姿が……。

「はあはあ……待った？……遅れてごめんね」

「どうしたのですか…………？」

「アルがねえ……、直前になってやっぱり娘にはまだ早いとかもしもシーナに何かあったらどうするんだと言って止めさせようとするから……」

ちなみにアルとは父親のアルバート・ウィンドル・ソフィネットのことである。

「えっ…………」

「大丈夫よ。ちゃんと説得しといたから。あの人はああ見えて娘のことになるとかなりの心配性なんだから……」

「よかった……」

「僕は「わたしっ」魔法……」

「わたしでしょ。」

「うっ……。本当にわたしじゃないとだめ？」

「家ではよくても貴族である以上、今後ほかの貴族と会うことも出てきます。そのときに恥をかくことになるのはシーナちゃんなのよ」

「う……。うん、……。わかったよ……」

精神は男でもシーナは女の子なのである。だから僕は淑女としての礼儀作法をこなさなければならぬのだ……。男なのに……。

「わっ……。わたしは……。これからまずどんな魔法を習うのでしょうか？ わたしに魔法の資質はちゃんとあるのでしょいか……。？ 魔術書はしっかりおぼえましたが……。知識だけで魔法は扱えませんか……」

もしそうだったら、魔法は諦めて剣術を習うしかないか……。海斗だったときは祖父に剣道を師事してたんだし……。魔法よりも危ないからかなり反対されそうだけど……。

「心配しなくても大丈夫よきっと。あなたは名門ソフィネット家の血をひいてるのだから、少なくとも魔法を使える人の一般レベル以上はあるはずよ」

「なら……いいですけど」

「そんなに心配なら早速、魔法資質を調べてみましょう」

「これは……？」

母親がだしたのは直径10センチほどの手に乗るほどの大きさの水晶。

「これは魔力量を数値化したり変換資質を計測するためのマジックアイテムよ」

「これはどうやってつかうのですか？」

「こうやって……手をかざして……魔力を込めるっ」

次々と浮かび上がる異界の文字。その示す内容は……。

術者…シルヴィア・ウィンドル・ソフィネット

魔力…6589、

変換資質…火…124、水…6370、土…235、風…340、

光…5309、闇…78、

「100で常人レベル、500で実用レベル、5000で宮廷魔術師レベルよ」

「えっ……、ということは……」

「そう、私は元宮廷魔術師なのよ」

「すっすごいです。お母様」

「ちなみにお父様は私よりすごいなのよ。元ランゴヴァルト王国近衛騎士団長で英雄だなんて言われてたのよあの人」

「お父様もお母様と凄すぎです……。これで僕が低かったら……」

「だいじょうぶよ。あなたは私たちの自慢の娘なんだから」

「お母様……」

「ほら、これに手をかざして」

「う、うん」

そして水晶に現れる僕のステータス。

術者…シーナ・ウィンドル・ソフィネット

魔力..9713

変換資質..火..448、水..9192、土..332、風..7230、
光..7890、闇..135、

.....。

.....。

.....。「えっっ?」

「こっこれは……、この年齢でこんなに……ありえない……一般レ
ベルどころじゃないわ。宮廷魔術師でもこんなに魔力があるひとは
わずか数名と言われてるわ……」

「それに魔力は大人になるにつれ増えるものなの……。この年で
これほどあるとなると将来……」

「なんか……すごい?」

「すごいところじゃないわよ……。これは史上稀に見る逸材よ……」

「これならエリスを守る……？」

「十分すぎるわよ……。守るところか有り余るほどよ」

「よかつ……。た。わたしにも資質が……。これでエリスを守る」

「それじゃあ、封印を解きますから試してみましよう。ちゃんとルーンは覚えてますか？」

この魔法を使うのに必要となるブレスレットは生まれてすぐに作られるらしい。魔法学校に入学するそのときまで保管しとくものらしい。

そして万一、未熟な者が誤って使わないよう、ブレスレットには封印が施されている。ちなみに以前のシーナは入学する直前だったので、魔法はまだ使ってないらしい。

「はい。魔術書に書いてあるものはほぼすべて」

魔法を発動するには、まず第一にブレスレットに魔力を込め杖（実際は決まった形はないので自由に変えられる。今はデフォルトのままである）を発現させる。この杖に術式を保存、記録することによって術式の展開速度が速くなり、結果必要な唱えるルーン（魔力の込められた言葉）が少なく済むのである。

第二に、起こす現象を頭で浮かべながらルーンを唱える。このと

きのイメージが非常に重要でこれが明確なほど魔法は強くなるらしい。

このルーンはあくまで魔法を発動するに当たって補助的な役割をするのであって、熟練した魔術師となればルーンなしで発動することもできる。正しくイメージとルーンを唱え、必要な魔力を込めることによって術式が展開されるのである。

まず唱えるのは初級中の初級の風属性の魔法。

「風よ……、空気を揺るがせ……吹き飛ばせ……、ウインドっ！」

成功すればただの強い風が起きる。

だが実際起こったのは嵐のような暴風。

石、花壇のレンガ、広場にあったイス、目の前にあるあらゆるものが飛ばされ、木々が激しく揺れ、ついに根こそぎ飛んでしまった。

「ひゃあぁ~~~~」

パリンッ。

何かが割れるような音。

「防御結界が……」

その音はこの屋敷とその周辺を覆っていた防御結界が破られた音で

あった。

「なっなんでっ」

荒れ狂う風。

ゴゴゴオオオー……。

それに伴う轟音。

10秒ほど経ってようやくあらゆるものを吹き飛ばし防御結界までも破った暴風は収まる。

たった10秒だったがそれは何十倍の長さに感じられた。

二人とも衣服は乱れ、髪はぼさぼさである。

「たった初級の魔法でこんなに……。結界まで破るなんて……」

「初級の魔法のはずだったのに……」

「どうやら魔法を本格的に学ぶ前に、魔力のコントロールをなんとかしないとね……」

「……はい……。すみません……」

「いったい何があったのですか？……まさか賊が侵入っ？」
駆けつけ慌てふためたくさんのソフィネット家の私兵達。

「いいえ、違うのよ。この子の魔法で……」

「「「えっ?」」」

—
— 続く —
—

第六話「守るための力？」（後書き）

今回ちょっと長くなってしまいました。

それに展開遅すぎるかも……。

書きたいことがたくさんあってどうしても文章が長くなってしまいます。

小説書いていると時間がかかり早く過ぎ去っていきます。

書き始めてから、次時計を見たら四時間経過してたり……。

第七話「守るための力？」（前書き）

少し改稿しました。

第七話「守るための力？」

「まさかこの歳で……これほどの魔力を持っているとは……」

あの後駆けつけた父さんに書斎までつれてかれ、何があったのか説明をした。

ちなみに防御結界は母さんがすぐに直してくれた。

「ごめんなさい……。……広場がめちゃくちゃになってしまいました……」

……しゅん。

「怪我はないか？」

「えっ……はい……」

「ならいい。魔力をちゃんと制御できるようになるまで魔法の使用を禁ずる」

「で、でも……」

「エリスを守るのだろうか？ たしかにお前はそれに足りうる力がある。だが、その使い方を誤れば逆に相手を傷つけてしまう、自分自身もだ。力とはそういうものだ。わかったな」

「……はい、わかりました……」

「わかったのならそれでいい。もう行ってよいぞ」

ボタン。

僕は父の書斎を出る。

書斎に残された父ともう一人。

「アル……ほんとに親ばかねえ……」

「おっ、……いたのかシルヴィ」

「ほんとに娘には優しいのね。きつく言ってるようで娘の心配ばかりして」

「そっそんなことはないぞ。それに……そういうならお前だってそうじゃないのか？ シーナが帰ってきたとき号泣してたじゃないか」

「うっ……。そりゃ……愛する娘ですもの。……お互い親ばかね」

「そうだな……」



僕が甘かった。

自分にも資質があるとなかって浮かれて、そしてこのざまだ。
こんなんではエリスやみんなを守るどころじゃない。もっとしっかりしないと。

力があってもそれだけじゃだめだ。正しく力を使うためにもこれからは魔法だけじゃなく勉強も疎かにしはできない。

「はあ……」

「シーナお嬢様」

「リファイアさん……」

「ほら、落ち込まないの。もうすぐお昼ごはんよ。ごはん食べて元気だして、午後から勉強がんばりましょう」

「子供扱いしないでよ。僕は食べ物なんか釣られたりしないよ」

「あなたの大好きなハンバーグだってありますよ」

「うぐっ……。そっそんなことない……」

「目が泳いでますよ」

「うゝゝゝゝ、わかったよ。どうせ僕は食いしん坊ですよ……」

「なら、早く行きましょう、お嬢様」

そういえば……たしか夢であつたあの子もハンバーグ好きだつて
言つてたな……。



「エリス……………」

「なあにお姉ちゃん？」

昼食をとつた後、僕は今エリスの部屋にいた。

そこにあるのは……、ピンク、ピンク、ピンク、ピンク、ピンク、
ピンク、ピンク、ピンク。

カーテンやらベッドやらタンス、あらゆるものがピンクである。

あと部屋中を埋め尽くすたくさんのぬいぐるみ……。なぜダンスやクローゼットの中までぬいぐるみで詰め込まれているのだろう。女の子の部屋といってもこれはさすがに……。

ここに来るのはすでに10回目以上だが、いまだにこれにはなれない。

ちなみに僕の部屋は意外と普通だった。ぬいぐるみや女の子らしい小物など置いてあるものの普通の女の子の部屋って感じだった。いや……。実際女の子の部屋を見たことはないのだが……。

実際、最初僕は普通の部屋で良かったと思っていた。机の引き出しを開くまでは……。

出てきたのはまず日記。ここまでは女の子の部屋なんだし普通だと言える。

……がっその中身に問題があった。開いた瞬間、僕は絶句した。

毎日、毎日、今日エリスはこんなこととしてかわいかったとか、思わず抱きしめてそのまま自分の部屋にお持ち帰りしたとか、頭などでしたときの笑顔がたまらないとか、ひたすらエリスのかわいさや容姿を褒める詩や文章が書かれているのはなぜだろう。しかも一日まるまる見開き一ページびっしり使って。ほかにもエリスの成長記録とか大量の写真とか諸々。

僕はリフィアさんに目覚めた場所や状況などを話して相談した。

あの謎の女の襲撃者とラクタムとかいう男。この二人についても聞いてみたが、どうやら昔、ソフィネット家はあまり良くないことをしていたようだ。水、光魔法の優れた者の多いソフィネット家は代々回復薬、治療薬などを売って、今の名門と呼ばれるほどの地位についたらしい。

そして10年ほど前この地方で感染症が広まった際に、その感染症の治療薬を高額で売りつけたらしい。

それは貧しい農村の人達にはとても買えるものではなかった。自分の領地のいくつかの貧しい農村では感染者が溢れ、挙句の果てに感染症の蔓延を防ぐためといってその農村の人達を皆殺しにしたらしい。

当主が現在のアルバート・ウィンドル・ソフィネットに変わってからは、回復薬、治療薬などは可能な限り価格を下げ、貧しい農村にも行き渡るようになった。しかし、いまだにソフィネット家を恨んでいる人の数多くおり、襲撃者はその一人の可能性があるとのこと。また3年前の賊の襲撃もその者達によるものかもしれない。

ラクタムという男の方はリフィアさんもわからないらしく、何者なのかどうして僕を助けたかはわからないままである。

これはソフィネット家つまり、エリスや家族のみんなの安全にも関わることで、今後警戒していかねばならないだろう。

あと僕とシーナことについても聞いてみた。仮説ではあるが一度僕、シーナは死んで（ただし身体は保存されて）三谷海斗として生まれ変わり、そしてまた死んだ僕の魂が元のシーナの身体に戻ったのではないだろうかと言っていた。それならブレスレットが反応するのも、エリスの名前を覚えていたのも全て辻褄が合う。

エリスの名前を覚えていたはもしかしてこの異常なまでのエリスへの愛故か……。僕が三谷海斗としての記憶を持っていたのは死んですぐだったからではないかということ。

そうすると僕は本当にシーナ・ウィンドル・ソフィネット自身であり、しかも僕は前世の自分に恋していたことになる。叶わない恋という点ではもしかしてこれは失恋となるのだろうか……？

……………。

それにしても前世のエリスへの感情や名前を覚えていたなんて、それに引き出しの中のカオスな中身といい、以前の僕はどれだけシスコンだったんだ……と思った。いや、でもエリスの方もかなり懐いてるからいいのか……？

「お姉ちゃん、どうかしたの……？」
どうやら僕は長い間、考えるのに集中してしまっていたようだ。

「え……あー、ごめんちょっとぼっとしてた。なんでもないよ」

「そう……？本当に……？」

僕を心配してか、顔を上へ向け僕を見つめる。そのまん丸とした目をうるうるしながら。

う……かわいっ！抱きしめて頭なでなでしたいっ！

その手をエリスへ伸ばそうとする。

「はっ！ぼっ……わたしは何を……？」

しゅん……。

エリスは残念そうにその可憐な顔をゆがませ、そのつぶらな瞳を曇らせ。

やめてくれ……それは反則だ……。

ああ……。耐えるんだっ僕っ、負けるなっ……。耐えるんだっ……。

だきっ……。

ぎゆうう……。

なでなで……。

耐えられませんでした……。

結局、身体の奥底から溢れるこの激しい衝動には耐えられませんでした。

エリスはこれ以上の幸せはないといった笑顔をし、僕の胸に頬をすりすりしてくる。

しょうが……ないよね……。こんな顔されたら誰でもふつう……。

結局、僕たちはリフィアさんに午後の勉強の時間になり、呼ばれるまですつとこのままだった。

第七話「守るための力？」（後書き）

PV一万突破っ！

たぶん……特にすごくないです。

めざせっPV十万突破っ！ やっぱり夢はでっかく……。

……というわけでご意見、ご感想を書いていただくと、私のやる気が倍増いたします。

第八話「守るための力？」（前書き）

今回でようやく世界観がわかります。

第八話「守るための力？」

世界が誕生するよりずっと前、始祖精霊アイリンは世界を創造するに当たってまず自らと同じ存在を創りだした。

それが六大精霊である。

土の精霊アウスは生命の基盤となる大地を、水の精霊エリアはあらゆる生物の源である海を、風の精霊シルフィードは大気の循環を、火の精霊テストロスは生命の炎を、光の精霊イシュザークと闇の精霊ブロンは昼と夜、光明と暗闇を生み出した。

そして六大精霊達は世界を効率よく運営するため、始祖精霊と同じくそれぞれ自分と同じ性質を持つ下位精霊を数多く生み出した。

世界は下位精霊とそれを束ねる六大精霊のは働きによって生命は溢れ、繁栄の時代を極めた。

青天の霹靂。

だがそんな平和な時代も長くは続かなかった。

突如として現れ精霊の力を狙うもの達が現れる。ありとあらゆるものを食らい尽くす異界の化け物、魔物であった。その勢いはとどまることを知らず、たくさん精霊は犠牲になりやつらはますます力をつけていった。

始祖精霊アイリンはそれに対抗すべく新たな創造を行った。それは人の創造だった。人の知力と繁殖力はすさまじく、魔物への対抗馬となった。人は精霊と契約することによってより新たな精霊の力を得た。

じわりじわりと魔物を押し返していく人間と精霊たち。

人の創造により魔物との戦いはうまくいってると思ったが魔物達の王、魔王の出現により再び形勢は逆転する。その力はすさまじく六大精霊達にとっても強大すぎるものだった。

たび重なる創造で力の弱った始祖精霊アイリンは己の命を犠牲にし最後の創造を行った。愛するわが子同然のこの世界とそこに住むあらゆる生命を守るために。それは世界樹であった。世界樹は精霊達の力を強め、そして新たな精霊をたくさん生み出した。

力を増した六大精霊たちと下位精霊、人間達の手により魔王を打倒し魔物をはるか遠くまで追いやることに成功する。

それから数千年後、人はいまだ残る魔物から身を守るため国家を築いていた。

中央には巨大な湖、エデッサ湖がありそこには世界樹のある精霊島が浮かび、それを中心として東にはランゴヴァルト王国、西にはアルバニア共和国、南にはハザリア帝国、北にはスバルの地があり、その周りには魔物の住む森が広がっていた。

「……以上、これがこの世界に関する成り立ちと歴史です」

僕は今、自分の部屋でリフィアさんに勉強を教えてもらっているところである。あれから一カ月たったが、実は貴族としてのかつ淑女としての礼儀・作法のを身につけるのに必死で勉強のはあまり進んでいなかったりする。

貴族とか無縁でなおかつ男だった僕にこの一カ月は地獄のような日々だった。リフィアさんは厳しく少しでも男っぽいことすると注意されるし、かわいい女の子の服着せられたり、なぜかリフィアさんがはあはあ興奮してたり、あれは恥ずかしすぎて悶え死にそうだった……。

でもそのおかげでだいぶ女の子らしくなったと思う。まだときどき一人称が僕になってしまうが……。心の中でもわたしにすべきなのかもしれないが、唯一残っている男の子らしいところでもあるので、あえてそのままにしている。

「何か質問はありますか？ シーナお嬢様」

「精霊と契約するとどうなるんでしょうか？」

「通常の魔法とは別の精霊魔法が使えたり、精霊の加護を受けたりできます」

「それってわたしにもできますか？」

「今はまだできません。無契約の精霊は精霊島に行かないといませ
るので……、中には例外もありますが」

精霊島とは世界樹があり、新しい精霊が生まれ、たくさんの精霊
がいることからそう呼ばれるようになったらしい。

「そうなの……？ 残念……です。精霊と仲良くなりたかったなあ……
……。……しょぼーん」

小さい時から精霊とか妖精そういうのに憧れていて、精霊が会え
るかもしれないと期待を膨らませていた僕は落ち込む。

「そんなに落ち込まなくても……三年後には精霊島にいきますから
……。」

「三年……か……。……はあー」

「……会うだけならシルヴィア様の契約精霊なら……」

「……………ほんと？」

顔を上げリフィアさんを見つめる。

僕は単にリフィアさんの方を見ただけだったのだが、リフィアさ
んから見れば子供の期待に満ちたきらきらしたような目で見つめら
れてるのであった。

「うつ……でっでも、精霊は気にいった相手にしか姿を見せないから必ず会えるとは限りませんよ……」

「うん、わかったよ」



「私の精霊と会いたい……?」

「はい、お母様」

きらきらきらきら。

「うつ……。でも……私の精霊は私以外に姿をあまり見せたがらないわよ」

「でも……。お願い。精霊さんに頼んでみて」

きらきらきらきらきらきら。

「わっわかったわ……。……シェリス? ちょっと出てきてくれる……?」

《……シルヴィア? どうかしたのか?》

そこには誰もいないのに頭に響くどこか心地よい女性の声。

「ちょっと娘に会ってほしいの」

《私はあまり人前に出るのがいやなんだ。お前だって知ってるだろう？》

またしてもどこからか聞こえる謎の声。

「そんなに恥ずかしがらなくても……。ねえ……。お願い」

《いくらお前の娘でも……》

「精霊さん……お願い」

「《！？》」

「シーナちゃん……まさかシェリスの声が聞こえるの？」

《なぜこの子どもに私の声が……？》

「えっ？だってさっきから……」

「あのねシーナちゃん……。姿を現せてない状態で声を聞くことができるのは契約者かほかの精霊だけなのよ」

「でもわたしにも聞こえたよ？それになんだかうっすらだけ青い人の形した光みたいなのが見えるような……。もしかしてこれが精霊さんなのかな……？」

「《！？》」

《そんなはずは……ならば……》

すると先ほどの青い光が急に強くなり目の前を覆い、思わず目を閉じる。

目を開くとそこにいたのは……、青く光る透明な人のようなもの。背中には六枚の光の羽が生えている。

「精霊さん……？」

目の前にはさっきよりもはっきり見える人の形をした青い透明の光があった。

それはとても美しく神秘的で、そのあまりの美しさに思わず目を奪われてしまう。

へこの感じ……まさか！？ ……いや考えすぎかな……それにあの方は……」

「シェリス？」

へ……いや、なんでもない……。……ちょっと知りあい似ていると思っただけよ……」

「お母様、この人が精霊さん？」

「ええそうよ。私の精霊のシェリス。属性は水の上級精霊よ」

「すごいっ！ きれい……」

へきっきれい？ 私……？」

「そうよ、シェリスは十分きれいでかわいいわよ。いつも言ってるじゃない？。だから恥ずかしがることはないわよ」

「わたしもそう思うよ。だってこんなに神秘的できれいで……」

へくっうう………そ、そんなことないっ……、……からかわないでくれ」

また一瞬光るとシェリスさんは消えてしまう。

「からかってなんかないのに……。シェリスは恥ずかしがり屋さんねえ……」

「わたしも早くシェリスさんみたいなきれいな精霊と契約したいな……」

「シーナちゃんならきつと必ずできるわよ」

へしかし……あの魔力の波動はやはり……。いや……でも……気にするわね……」

第八話「守るための力？」（後書き）

これからは少しペースを落として質を上げていききたいと思います。
更新は二日に一度くらいかな……？。

第九話「魔物との遭遇」

「大気よ……、水よ……、氷結せし無数の槍を……、その氷の刃を以って敵を貫き通せつ、ブリザードっ！」

魔法により大気中の水分を凝縮、氷結してできた数十にも及ぶ氷槍は高速で、全て狙い違わず目の前の魔物へと飛んでいく。

1. 5メートルほどの大きさをもつ狼のような姿をした魔物5匹を同時に瞬殺する。

「お嬢様……すばらしいです。あれから一週間しか経ってないのに、もう中級魔法をここまで制御できるなんて……」

シーナの放った魔法を褒めちぎるのはリフィアさん。僕とリフィアさん、今二人は魔法の練習のために屋敷の近くにある森へと来ていた。

「……ありがとうございます……リフィアさん、……でももっと強くなりたい。いや強くないといけないんだ……」

「十分強いですよ、シーナお嬢様は……。この年でしかもこんなに早くものにしてしまうなんて……」

「あのラクタムとかいう男には到底……敵わない。世の中にはあんな

なやつが数えきれないほどいるんだろうし……。それにソフィネツト家には敵が多い。もつと強くないと……。エリスを……。今の幸せな生活を守るために……」

「シーナ様……。シーナ様ならきつと誰よりも強く優しいひとになれますよ」

「リフィアさん……。ありがとう」

「そつそろそろ帰りましょうか？夕食も近いですし……。それにシーナお嬢様の好きな甘い果物もありますよ」

「あつ……。うん」

甘い……。果物……。じゅるり。

「よだれ、垂れてますよ」

「……はっ！」

（は……。恥ずかしいっ。リフィアさんに食いしん坊だと思われたかな……。？ほっぺたが熱いや……。真っ赤になってるかも……）

（ああ……。お嬢様……。頬を真っ赤に染めて……。お嬢様のほうが……。まるでリンゴみたいでおいしそう……）

「……じゅるり」

びくっ！

「なっ……なんか急に寒気が……。リフィアさんの方からなんか怪しい視線を感じるような……」

みすみず
（瑞々しいお身体……。すべてで柔らかい肌……）

「やっぱりメインディッシュは瑞々しいほうがおいしいですわよね……」

リフィアさんからはねっとりとからみつくような視線。

「ひゃあっ……」

「どうかしましたか……。？お嬢様？」

ぶるぶるぶる。

「なっなんでもない……。です。……。やっぱり果物は瑞々しくて新鮮なほうが甘くておいしいよね……」

「はい……。瑞々しくてすべすべなほうが食欲をそそりますよね」

（リフィアさん……。絶対全く別のことを考えてるよ……）

がくがくぶるぶる。

リフィアさんの怪しい視線を受けながらも、なるべく気にしないよう努力して、僕はリフィアさんから少し間を開けて歩く。

それから数分後……。

僕とリフィアさんは屋敷への帰り道を歩いている途中……。

「「っ!？」」

殺気。

突如として向けられる殺気。

「これは……、囲まれましたね……」

一つや二つどころではない膨大な数のこちらへ向けられる。

それと一つ、これまでの魔物とは別格の強大な殺気が感じられる。

グルルルルウウ………。

「ハウンドウルフ……とスコティッシュ・ハウンド……」

ハウンドウルフは先ほど倒した魔物で、スコティッシュ・ハウンドはその上位体である。その数は合わせて20を超える。

「シーナ様は私の後ろへ……。私に対応いたします」

「でもどうやって?」

たしかリフィアさんは魔法を使えなかったはずだ。それに僕は魔

法を使えるが、これほどの数を一度に相手にするのはさすがに無理がある。絶望的な状況である。

「はああああー」

するとリフィアさんは素早く魔物へと駆け出すと同時に何かを投げ出した。

シュン……、シュンシュンシュン……。

……ガルウ？

サクツ。

グギヤアアー。

サクツサクサクサクツ。グギユツボガツズシャー。

グギヤアアグギヤガルアグギヤアアグギヤアアー。

「ええっ!?!」

次々と倒れる魔物達。

そこには攻撃に一切の無駄などなく、投げられたナイフは寸分狂わないで魔物の脳天へと突き刺さっていく。

走りながらあるいは高くジャンプしながらナイフを投げ、ときにはバック転をして避け、ナイフがなくなれば素手で戦う。その戦い方は優雅でかつ残忍で、到底人間業ではない動きで次々と魔物を屠^{ほふ}っていくメイドがいた。

「……リファイアさん……、あなたはいったい何者ですか……」

鳴り響く魔物の断末魔の叫び。次々と積み上げられてゆくハウンドウルフの死体。

……そしてとうとうスコティッシュ・ハウンド一匹となった。

「ふう……、あと一匹ですか……」

そこには返り血一つ浴びることなく、服も乱れず元のままで佇むリファイアさんがいた。

「リファイアさん……何者ですか？」

「ただのメイドですが……何か？」

がくがくぶるぶる。あんなことがメイドにとって普通なら、軍隊なんかいらないう……。

「いえ……なんでもないです……」

「……では、最後はシーナ様がどうぞ……。今のシーナ様なら倒せるはずです」

「ぼっ……わっわたし？……いいけど……」

ガギヤアアルウウー……。――

「荒れ狂う風よ……、嵐よ……、雷雲を呼び起こし……、我が敵に神の鉄槌を下せつ、神雷の剣^{つるぎ}つ、サンダーブレードっ！」

スコティッシュ・ハウンド目掛けて雷撃でできた巨大な剣が落とされる。死体からは肉の焦げる匂いが立ち込める。

「お見事です。お嬢様」

「いや……ほとんどリファイさんが瞬殺したような……」

「……些細なことです。それよりも屋敷に帰りましょう。辺りも暗くなってきましたし……。また魔物が出るかもしれません」

「些細なことなんだ……。それにいくら魔物が出ても……。リファイさんがいれば何の心配もいらないと思うよ……」

「そんなことはありませんよ。あれは下位の魔物ですし……」

「…………でもあの数を傷一つ負うことなく難なく倒せるのもどうかと思うけど……………」

第十話「邂逅」 (前書き)

長くなっていました。

第十話「邂逅」

「……パーティ？」

「二週間後にアルの誕生日パーティがあるのよ」

「お父様の……？」

「そう、……あなたも出席するんだからきれいなドレスを用意しなくちゃね……」

「は……恥ずかしいです。知らない人の前に出るのは初めてだし……」

「大丈夫よ。シーナちゃんは十分かわいいわよ。ほかの貴族のご子息も参加なさるからきつとモテモテよ」

「……………」

「そうと決まれば当日着るドレスを買わないとね……。シーナちゃんはどうなのが好きかしら……。白？ピンク？ひらひらのたくさんついたやつ？それとも……」

タタタタッ。

（僕は男だー。男にもてたくないっ！）

全力でお母様から走り去る僕。

「シーナちゃんてば恥ずかしがり屋なんだから……」

タタタタタツ、タツ。

「はぁ……はぁはぁ」

二週間後にパーティ……、ひらひらのかわいいドレス……、男に
もてもての僕……。

「にゃああああー」
思わずあげてしまう奇声。

「ううう……、……鳥肌が立ってきた」
僕は心は男でも身体は女だから……、いつか……男と結婚しない
といけない……のか……？

重大な事実に気付く僕。
ショックで立ち直れそうにない。

「……………」

「……………」

「……そうだ、今日は気分転換に森で魔法の練習をしよう。……」

人だけど、魔法も十分使いこなせるようになったし、大丈夫なはずだ」

そして僕は最近魔法の練習に使っている近くの森へと向かう。



「……、……ブリザードッ」

ザクッ。

氷槍が脳天に刺さり、倒れる一体のハウンドウルフ。

「魔物にもずいぶん慣れてきたな……。これならこの森も安全だな」
この森に来てすでに魔物は十体以上は倒している。

「おっこれは……。ツクの実だ……。この甘酸っぱいのがいいんだよね。もって買えろっかな……」

ガルグアアアー！。

突如として聞こえた魔物の吠え声に、背後を振り向くとそこには……。

今まさに引き裂かんとする鋭い爪と牙。このまま僕の身体に達しその鋭利な爪と牙はいとも簡単に引き裂くであろう。

「えっ……、だめだ……詠唱が間に……合わない」

これは自らの魔法に過信し、魔物を侮った僕への罰なのだろうか。襲いかかる魔物にどうすることもできない僕には目を閉じ、むなしく命が奪われるのを待つことしかできなかった。

……………そう思ったが…………。

「はああああー！ー！ー！」

ザシュツ

ドトツ……ドタツ

振り落とされる剣。真ん中で胴体を真っ二つに切り裂かれるハウンド・ウルフ。

それをやってのけたのはシーナと同じくらいの年の容姿の整った金髪の少年だった。

「……………はああ、…………君大丈夫？」

「あ……、ううん……。大丈夫」

「よかった……。ところで君は……。っ!!」

「……さっきはありがとう。わたしはシーナよ」

「……………」

「……ん？……何か顔についてる？」

「なぜか先ほどから見つめられているような……」

「どこか僕におかしいところでもあったのかな……？」

「……………はっ……。いっいや……。なんでもない。僕はカルマ。よろしく……」

「こちらを見つめていたかと思えば、突然顔を赤く染めそむける少年。」

「そう……。？ならいいけど。カルマて呼んでいい？わたしもシーナって読んで」

「あっうん……。しっ……。シーナ……」

「カルマという少年は挙動不審で落ち着きがない。それに顔も赤く風邪でも引いているのだろうか？」

「ちょっと、じっとしててね」

「ちよっ……。まっ……」

「熱があるか確認するため僕のおでこ彼のおでこをくっ付ける。」

「んゝゝゝ。熱はないかな……」

ぽっ。

さっきより増して赤くなるカルマの顔。

「ん？やっぱり熱あるのかな……。さっきより顔真っ赤だし」

「はあはあ……。だっ大丈夫だからっ、熱なんかないからっ。ほっほらこんなに元気だから」

「そう……。？でも念のために……。ほら」

魔法で小さい氷を作りそれを持っていたハンカチで包んで渡す。

「シーナ、君は魔法が使えるのっ？」

「うん」

「すごいな……。その年で……。ということはさっきのは……。しかもそれは風と水の合成魔法じゃないのか？」

「そうだけど……」

「二属性も使えるのか……。僕は剣が少し使えるだけだよ」

実際には水、風、光の三つだけど。

「でも十分すごいよ。魔物を一刀両断してたじゃない」

「いや……、たまたまだよ。あのときは必死だったし」

「たまたまじゃないと思うけどな……。迷いなんかなく魔物に向か
ってたし、それに……カルマがいなかったらわたしたぶん死んでた。
もう一回言うね。ありがとう」

感謝の気持ちをちゃんと伝えたくて彼の手を握りながら、心から
お礼を言った。

「う……、うん……」

「早く風邪治るといいね」

「………………。……だから熱があるんじゃないかって……。君がかわいく
て……。なのに……」
ぼそっとつぶやく何かをつぶやくカルマ。

「何か言った……?」

「言っていない。なにも言っていないから」



カルマ side ..

僕は森の中にいた。

なんか辺りがすこし涼しいと思い、そちらへ向かうと地面が一面凍っているのを見つけた。

すると少し離れた方から魔物の気配がしたので進んでいくと……

「っ!？」

そこには青い髪をした少女と狼のような姿の魔物がいた。

このままではあの華奢な少女は魔物に抵抗する術もなく、いとも簡単にその命を奪われてしまうだろう。僕はそう思い剣を抜き魔物へと駆けだした。

タタタタタッ

「間に合ってくれ……」

僕は剣を習っているが、子供の力ではうまく魔物を相手にすることが出来るかは怪しい。

それでもやるしかない。人を見殺しにすることはできない。しかもまだ子供であるのだから。

タタッタタタッ

「えっ……、だめだ……、間に……合わない」

少女の恐怖に引きつった表情。

間に……合うか……？

「はああああー！ー！」

剣を両手で持ち力を込めて魔物へと振り落とす。

ザシユッ

剣が途中で止まりうそうになるも、渾身の力を込めて切り落とす。

ドトッ……ドタッ

魔物は胴体を真ん中で真っ二つに切り裂かれ地面にころがる。

「……………はあはあ、……君大丈夫？」

「あ……、ううん……。大丈夫」

どうやら少女は怪我也負うことなく無事のようにだ。

「よかった……。ところで君は……………っ！！」

僕は正面から彼女の顔を見ると……

「……………さっきはありがとう。わたしはシーナよ
そこには……、

淡い青色の髪は風に流れ、長いまつげにその細長い眉、青く透き通った瞳、熟れきらぬ果実の瑞々しさを持つ小さな薄桃色の唇、す

べては完璧なまでに美しい位置に静止したままであった。

白磁のように白くすべすべな肌、欠点のない目鼻だち、すべてが精巧に出来た人形のようなだった。

それは単に美しいとか、綺麗とかそういう次元のものではなかった。

「……………」

「……ん？……何か顔についてる？」

「……………はっ……………、いいや……………なんでもない。僕はカルマ。よつよろしく……………」

僕は思わす彼女の顔をずっと見つめていたようだ。

「そう……………？ならいいけど。カルマって呼んでいい？わたしのこともシーナって読んで」

「あっうん……………。しっ……………シーナ……………」

顔が熱い。

「ちよっと、じっとしててね」

「ちよっ……………まっ……………」

急に少女の顔が近づいてくる。

……………何をするつもりなのか？

その人形のような端麗な顔は止まることなくどんどん近付いてくる。その小さなぷるんとした薄桃色の唇に目が奪われる。

……まさかっ……キッ……キス!?

僕はこの可憐な少女にキスをされてしまうのだろうか?

ドキドキッ、ドキドキッ

僕の心臓の鼓動は早く脈打っている。

ほんとに……、キッキスを?

目をつむりその時が来るのを待つが……、

コツン

「んゝゝゝ。熱はないかな……」

どうやらおでことおでこをつけて熱があるか確かめたようだ……。

そして目を開くと真ん前には少女の顔。

ちっ……近いっ。

ぽっ。

「ん? やっぱり熱あるのかな……。さっきより顔真っ赤だし」

「大丈夫だからっ、熱なんかないからっ。ほっほらこんなに元気だから」

「そう……？でも念のために……ほら」

そうすると彼女は魔法で小さい氷を作りハンカチで包んで渡してきた。

「シーナ、君は魔法が使えるのっ？」

「うん」

「すごいな……その年で……。いうことはさっきのは……。しかもそれは風と水の合成魔法じゃないのか？」

……驚いた。二属性の資質を持っているだけでもすごいのに、それをこの年で難なくこなしているこの少女は天才だ。数十年に一人とないだろう。

「そうだけど……」

「二属性も使えるのか……。僕は剣が少し使えるだけだよ」

「でも十分すごいよ。魔物を一刀両断してたじゃない」

「いや……。たまたまだよ。あときは必死だったし」

あときは必死でたまたまうまくいっただけで、もう一回同じことをやれと言われたら、たぶんできないだろう。

「たまたまじゃないと思うけど……。迷いなんかなく魔物に向かってたし、それに……。カルマがいなかったらわたしたぶん死んでた。もう一回言うね。ありがとう」

「う……。うん……」

それでも、こう……褒められてお礼を言われるってのはとてもこそばゆい。

「早く風邪治るといいね」

「……………。……だから熱があるんじゃないかって……、君がかわいくてそれで見とれてたからなのに……」

「何か言った…………？」

「言っていない。なにも言っていないから」

ふう……、聞こえなくてよかった。聞こえてたら恥ずかしすぎるよ。

それにしても少女はどうしてこんな森にいたのだろうか……？

服装をみると上質の布が使われ、細かい刺繍やレースなどが施され、ひらひらは多すぎず少なすぎず上品なデザインになっている。おそらくどこかの貴族の娘なのだろう。

「カルマくん……、一人でここ来るの初めてで……、どうやって出ればいいのかわかんなくなっちゃって……。ちょっと教えてくれる？」

「……うん、わかったよ。たしかこっちの方……に……行けば……」
あれっ……、ここどこだ……？

「ごめん、僕も迷ったみたい……」

「
え
〜
〜
〜
〜
」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
—
—
—

第十話「邂逅」 (後書き)

これからはなるべく一話ごとに題名をつけていくつもりです。

第十一話「迷子の二人」

カルマ side ..

困った。

どうやら僕たちは迷子になってしまったようだ。

シーナも森からどうやって出たらいいかかわからないらしい。

もう日が傾き、辺りが暗くなってきた。

このままだと森から出れず、みんなに心配をかけてしまう。

「カルマはどうしてこの森にいたの？」

「ん……？ あゝそれは……、道に迷って……気付いたら森の中に……」

「……どうやって道に迷って、こんな森深くまで来るの……？ もしかして……かなりの方向音痴？」

「いや……、ちょっとこの辺来るの初めてで……土地勘なくて」

「それでもこれは……かなりひどいと思うよ……」

「うっ……」

そう……なのか、今まで一人で遠く行ったことなかったし……気付かなかった。

「でっ、これからどうする……？ わたしはまだ索敵系サーチの魔法は使えないし」

「そうだね……、もう暗くなり始めたしどこか安全な所見つけて、そこで一晩過ごすしかないか……。でもこの森の中で安全な所なんであるのか……」

この森は魔物がうようよいるし、夜になれば夜行性の危険な魔物も多い。

「それなら私に任せて。結界魔法と魔除けの魔法をかけておけば大丈夫なはずよ」

「そうか……なら安心だな」

そうか……この子は魔法が使えるんだったな……。

「うん」

ぐうーーー。

シーナの方から何やら結構大きい音が響く。
音が大きいので何かと思ったが……、どうやらそれはお腹の音だ

ったようだ。

「ふっ……ははははっ。ふふっ、シーナ……お腹空いたんだね。ほら……パン、肉もはさんであるぞ。少しなら食料持ってきたから」

「じゅるり。………そっ、そんなことないもん。それにさっき拾ったツクの実があるから」

頬を赤くして必死に否定するシーナ。
このむくれる顔もなかなか可愛い。

「ふっふふっ、そうか……ならこれは僕が食べるな」

「あっ……、………うー」

しゅん……。

ものすごく欲しそうな目でこちらを見つめるシーナ。

「いないんじゃないかったの？」

「いついない………から」

……これはちよっとおもしろいかも。

肉を挟んだパンを近付けると幸せそうなとろけたような顔になり、遠ざけるとしゅんと悲しそうな顔をする。まるで子犬みたいな反応するからとても可愛い……。

「そう。なら遠慮なく……あ〜ん」

「あ〜ん、……うう……おいしそう」

きらきらきらきら。

「……………」

なんだかかわいそうになってきた。そろそろやるか……。

「やっぱりお腹いっぱいだから……よかったら食べる？」

「なら……もらってあげる……」

瞬間、にぱあと笑顔になり、これ以上の幸せはないといった表情でむしゃむしゃと食べ始めるシーナ。

「……………」

結構大人っぽいところもあっておとなしい子だと思っていたのだが、こんな子供のような顔もするんだな……。

どきどきっ。

心臓がばくばくしてる。

僕はこの子のことが好きなのかもしれない。

「はむはむ……。……。ん？カルマは食べないの？」

「ああ……。君に全部あげたから」

「えっ……。どうして？」

「……。君がかわいかったから……。つい」

「っ！？……。ごほっ……。ごほっ。なっ……。何言ってるの」
照れる姿もかわいいなあ。

「ほら……。水」

僕は持っていた水のはいった水筒を渡す。

「ごくっごくっ……。ぷはぁ……。……。じゃあ、これ……。食べて。まだ半分残ってるから」

そう言ってシーナが渡すのは、先ほど僕があげた肉入りパン。
しかもさっきまで彼女が咥えていたやつだ。

「いやっ……。いいよ」

これ食べたら間接キスになっちゃうよ。もしかして気付いてないのかな？

「ほら、遠慮しない」

「だから……かつ……間接キス……だって」

「うっ……、そうならそうといってよ……。じゃあツクの実食べて」
リンゴみたいに真っ赤になるシーナ。

「わかったよ」

彼女からツクの実をもらう。

実はこれはこの辺の地域でしか取れない果実である。だからこれを食べるのは初めてである。

「うまい」

「そうでしょ。その甘くてそれでちょっと酸っぱくて、その絶妙なバランスがいいの」

「そうだね。これはなかなかうまい」

「あとね………」

この後も僕たちはたわいない話をしながら歩き、一晩過ごすのにちょうどいいところがないか探したのだった。

見つけたのは小さな湖とその辺りにすこし開けたところ。

「きれい……」

「……湖だね。これなら身体の汚れを落とせるな。僕は魔物の返り血も少し浴びちゃったし」

早く入りたいな……。血が付いてるのはあまり気分はよくないしな。

「その前に……っと……。聖なる光よ……。魔を遠ざけ……。いかなる攻撃も通さぬ鉄壁の結界よ、アイギスっ！」

シーナがルーンを唱えると……。湖とその周辺を丸ごと包む結界らしきものが展開される。

「防御結界よ。ついでに魔除けの効果も付加してあるから絶対魔物を寄せ付けないし、通させもしない」

「すごい……。こんな高度な結界を広範囲にできるなんて」
ただの結界だけでなく改良して効果を加えるなんて……。おそろくかなり高度の魔法であると思われる。

「ん……。ありがとう」

「それじゃあ……。カルマ……。入ろうか」

ぬぎぬぎ、ぬぎぬぎっ。

そういうと彼女は当然服を脱ぎ始める。

「ちよっ……。ちよっと待ってっ！僕がまだいるって」

脱ぎかけの服のすき間から彼女の絹のように白い素肌が覗いている。

「……………ん？なんで？」

「なんでって……僕は男の子だよ。はっ裸が見えちゃうじゃないか」

「……あっ……そうか。そうよね……。わたしは女の子よね」

「そっそれじゃ、先にいいよ。僕は後で……」

「ん〜。……わたしはあまり汚れてないし、魔法でなんとかするから。じゃあ……あっちにいるね」

「わっわかった」

シーナは衣服を直すと、さきほどの少し開けた方へ行った。

「ふ〜。びっくりした」

「じゃあ……さっさと洗い流すか」

湖で身体を洗い流し、明りのあるほうへ行くと、どこからか持ってきたのか毛布二枚をもったシーナがいた。

「あっおかえり」

「その毛布は……？」

「ひみつ。それよりはやく寝よ。もう結構……夜遅いし」

「あ……うん、わかった」

彼女から毛布を渡されるとそれをかけ、シーナの隣に寝転がる。

女の子の隣に寝るのはときどきするな……。こんな可愛い子だっ
たらなおさら……。

「おやすみ……、カルマ」

「あっう……うん、おやすみ」

すーすー。

すると聞こえてくる寝息。

……って、はやっ！

そんなに疲れてたのかな？そりゃ……女の子なんだしな……。こ
んな森で歩き回ったんだし。

横を見るとやすらかに眠るシーナのあどけない顔。

ときどき。

だめだっ……、こんな状況で眠れるかつ。

結局なかなか落ち着かず、眠るまでかなりの時間がかかったのだ
った。

第十一話「迷子の二人」(後書き)

アクセス数、お気に入り登録数、順調に伸び続けています。
ありがとうございます。

こんな稚拙な文章ですが、これからもよろしくお願いします。

第十二話「フェアリーダンス」

シーナ side ..

「んゝゝ、んん……」

目が覚める。

「トイレ……」

カルマが寝ているのを確認してから僕は茂みへ向かう。

もう夜なので真っ暗なのだが、僕は光属性の魔法が使えるのでなんの問題もない。

けどあまり明るいと魔物が集まってきて、いくら防御結界を張ってようと破られるかも知れないので、最低限の明かりで向かった。

「はずかしいな……」

いくら元男の子でも女の子の身体に慣れてしまった僕にとって、こんなところするのはかなり恥ずかしい。

「だれも……いない……よな」

当然あたりにだれもいないはずなのだが、思わず確認してしまう。

もしカルマに見られたら恥ずかしすぎてどうにかなっちゃうだろう。

「……………湖……………」

トイレを済ました僕はふと目に入った湖が気になり湖へ向かう。

「魔法できれいにしたからって、やっぱりちゃんと洗い流したいな……………」

するする。

服を脱ぎ、裸になる。

ちゅぷ。

裸になった僕はまず片足を湖の水につける。
ひんやりとしてとても気持ちいい。

ちゅぷちゅぷちゅぷ。

どんどん入っていく、やがて肩まで水につかる。

「ひんやりとして……気持ちいいや」

そして背を水につけ浮かぶ形をとる。

「きれいだ……。青いなあ……」

そこにあったのは満月。元いた世界とは違ってこの世界の月は青い。

月夜の光でも十分明るかったので明かりを消すと、月の光に照らされて湖は青く光りそれはとても神秘的だった。

「ほんとに異世界に来ちゃったんだな……………」

でも、この世界に来てよかったと思う。

あたたかい家族や毎日の楽しい生活。

僕は今、生まれてきて一番幸せだと思う。

それに守りたいものもある。

エリス。

彼女の笑顔を見てると、とても幸せな気分になる。

彼女の悲しそうな顔を見ると、僕も切ない気分になる。

エリスを……、僕の妹を……、守っていきたい。その笑顔がいつまでも続くように。

僕はそのためにはなんだってする。

守るために強くなる。

エリスが笑っていられるように。

「……………」

どのくらい経っただろうか。

僕はしばらくの間、湖に浮かんでいた。

「そうだ……。ここなら……。あれの練習ができる」

飛行魔法の練習。

僕のオリジナルの魔法。

この世界に飛行魔法はまだ開発されていない。

そこでこれを完成させれば、空からの魔法を打てたり、回避するのが容易になったりする。ほかの者が飛べない中で自身だけ飛べれば戦闘においてかなり有利にたてるだろう。もっとも……一部の高級精霊と契約をし精霊憑依した者を除いてだが……。

精霊憑依とは自らの契約精霊と一時的に一体化することによって、飛行能力とより高度の精霊魔法を得ることができるものである。

で……、僕の飛行魔法は疑似的に精霊の羽を再現し、飛行能力を得ようというものである。

僕の膨大な魔力があるからこそできる芸当でもある。

お母様に精霊シェリスに何度か会わせてもらい、その羽根を観察、研究してできたものである。羽を出すところまでは成功したが、危ないのでまだ一度も飛行実験をしていないのである。

それにこの魔法はかなりの魔力を消費してしまうので、明日の分を残すことを考えると、せいぜい五分程度が限界だろう。

「それじゃあ……、……シャイニングフェザーっ」

羽を展開するだけなら何度もしているし、この魔法自体は膨大な魔力を必要とするだけで展開させるの自体は簡単である。なので詠

唱は最低限でもできるのである。

背中に展開される一対の透明な羽。

シェリスさんのものよりは小さく輝きは小さいが、十分飛行能力は得られるだろう。

「よし。それじゃあ……」

念ずるとまず少しだけ浮かび上がる。

「飛んだっ」

今度はもう少し高く、三メートルほど。

「よしっ。これならいける」

水面と水平になるようにして飛んでみる。
高さも自由自在に。

「やったっ……成功だっ」

水面ぎりぎりを飛ぶのに挑戦してみる。

………が、

じゃぷん……じゃぷじゃぷん………じゃぽん。

「……ごほっ、……ごほんっ」

顔を水面に何度もついてしまう。
ついたり、離れたり、ついたり、離れたり、最後には水の中へ突
入。

「あゝ。苦し……、やっぱり難しいな」



カルマside..

僕はふと目覚めると、隣に寝ていたシーナがいないことがつく。

「あれっ?……シーナ……?」

「……いない。どうして……?まさか魔物に?」

「結果は……ちゃんと機能している。でも……万一のこともある。
探しにいくぞ」

シーナが作った中に光を閉じ込めた、手のひらに乗るサイズの立

方体の形をした氷。

それを持ち辺りを捜し歩く。

「いったいどこにいったんだ？」

すると湖の方になにやら飛び回る明りを見つける。

「なんだ……？ あれは？ あっちにいるのかもしれない」

敵の可能性もあるので茂みの中に隠れながら近づく。

と……、そこにいたのは。

背中に透明な二枚の羽を生やし、宙を優雅に飛びまわるものを見つける。

それは少女の姿をしているのに気がつく。

「まさか精霊……？」

普通は精霊島にしかないはず……、でも例外はあると聞いたことがある。あれがその例外なのだろうか。

それは月夜の青い光に照らされ、優雅に飛び回る。

ときどき水面にちょこんと着水しては湖に波紋が広がる。

それはまるでダンスを踊っているようで、とても美しく幻想的だった。

いつまでもこうして見ていたい。

「……………」

しばらくこうして見つめていると、精霊？は着水しこちらへ向かってくる。

生まれて初めて会った精霊と話をしたくて僕は茂みから出た。



シーナside..

今度は急加速、急停止、ターンに挑戦。

なんとかふらつき落ちそうになるが今度はなんとか成功する。

しばらく飛行を楽しんでいると、いつの間にか残り時間は30秒切っていたので高度を下げゆっくりと着水する。

ちやぽん。

「初めてにはなかなかうまくいったかな……」
身体を拭こうと、陸に上がると……、

ざわざわ……ボタン。

茂みから出てきて倒れる人影。

「痛っ……た……。……あっ……。……シーナ？」
よく見るとそれはカルマであった。

僕は今、服を着ていない……。全裸である。

つまり……。カルマに裸体を見られたわけで……。、

「にやああああああああアアアアアア——」

満月の月夜の湖に少女の悲鳴が響き渡る。

t o b e c o n t i n u e d — — —

第十三話「別れと決意」

昨日あの後僕は、カルマをビンタではり倒したあと、急いで元の場所に戻って何重にも結界を自分の周りに張って寝た。

あんなことがあったらもう恥ずかしくて、カルマとは顔を合わせづらい。

「シーナ……、シーナってば」
すると背後から聞こえるカルマの必死な声。

「来ないで」

「ごめん、僕が悪かったって」

「わたしの裸見たくせに」

「悪かったよ……。あのときは精霊だと思って……。あまりにも綺麗で見とれてたんだ」

「じっくり見たんだ……。わたしの裸じっくり見たんだ」

「ごめんってば……。あのときは暗くてあまり見えなかったって」

「でも見たんじゃない」

「うぐっ……」

「カルマなんか知らない」

「ほら……機嫌直してくれよ。ほら……ツクの実またとってきたから」

ツクの実……。

ほどよく熟しておいしそう……。でも……、

「食べ物なんかにつられたりなんかしないもん」

「ちがうもあるよ。さっき見つけたんだ」

「……それは希少でめったに手に入らないあのシュカの実？」

「えっ……そうなの？」

とろけるような甘さとわずかな酸味が特徴らしい。
まさかそれがこの森にあるとは……。

食べたい。ものすごく食べたい。

「……いる？」

「……うん」

カルマからからシュカの実をもらい口に入れる。
広がるとろける甘さと、絶妙なバランスの酸味。

「おいしい……」

「そう？ならよかった」

「幸せ……。こんなおいしいものがこの世に存在したなんて……」
ほっぺたが落ちそうなくらいうまい。

「……許してあげる。……べっ……別に食べ物につられたわけじゃないんだからねっ」

決して食べ物につられたじゃない……、それじゃなんだかカルマに餌付けされているみたいだ。

「ぷっ……。そうか……。ありがとう」

「それにしてもほんとにおいしいわね。このシユカの実……」

「昨日はほんとにごめん。僕が悪かった」

「……………ばか」



それから二人で連携して魔物を倒したり、しょうもない話をして笑いあったり、魔法で作った氷に果汁をかけてかき氷を作って食べたりと有意義なひと時を過ごした。

カルマといっしょにいるととても楽しかった。

それは昼を過ぎたころだった。

森を歩き続けやがて見つけたのは森の出口。

「森を出れば後は帰れると思う……」

「そう……。じゃあ……。もうお別れだね」

「うっ……。うん。……。シーナともう会えないのはさびしいな……」

「わたしも……。短い間だったけど楽しかった」

「でももう会えないとは限らないよ。こうして会えたんだから……。いつかきつと」

僕のフルネームを教えられるのかもしれないが、ソフィネット家は恨まれているし……。もしもカルマに嫌われたら……。また僕と関わることによって危険が伴うかもしれないと思うと言いだせなかった。

「そう……ね。また会えると信じてる」

「……………」

「……………さようなら、……カルマ」

たぶんこの世界に来て初めての友達だったと思う。いや……、前の世界でもあまり親しい人はいなかったから、生まれて初めての親しい友人なのかもしれない。

「……………さようなら」

「……………シーナ、好きだ……」

金髪の少年のつぶやいたその声は風之音にかき消され、少女に聞こえることはなかった。



カルマと別れた後、僕を探しに来てたりファイアさんに見つかり夕食までこっそり叱られた。

そして今……、

「はぁ……」

「エリス……もういいでしょ？」

「だめ。すごい心配だったんだからね……。お姉ちゃんが……。死んじゃったらどうしようって……」

あれからエリスはお姉ちゃんとずっといっしょにいたのか言っ
ずつと僕に引つついている。

一日中ずっとだ————。

魔法の練習のとき、寝るとき、お風呂に入るとき、……。挙句の果
てにはトイレまで一緒に来ようとしてきた。

ずつと手を繋いだままだし、ときどき腕を組んで顔をすりすりし
てきたり、そして夜は抱き枕に……。とにかく僕から離れようとし
ないのだ。

それになんか屋敷の人達には会うたびに微笑ましいものを見る目
で見つめてくるし……。

一人で行こうとするものすごく怒る。 ……といっても全然怖

くないし、むしろそのむくれた表情は可愛いし守ってあげたくなるのだが……。いくら妹とは言え女の子にいつまでも抱きつかれては、心は男の子である僕はときどきせずにはいられない。

以前の……、前世の？僕ならあの日記から判断するに……嬉々として受け入れそうだが……。

「やっぱり危ないから……、やめようよ……」

「エリス……約束したじゃない……」

「でっでも……」

僕はこれから剣の練習である。

僕は魔物との戦いで魔法に頼りすぎるはよくないと思い、あれ以来剣の特訓をしている。

エリスが特に反対したが、エリスを守るためだと説得を試みた。すると絶対勝てるわけないと思ってたのか……一度勝負して騎士団長に剣で勝てたらという条件で許してくれた。

剣道をやっていたとはいえ、祖父以外相手にしたことはなく祖父には常に負けていたし、しばらく剣を振っていないこともあって自信は全くなかった。

危ないので勝負は真剣ではなく木刀で行われた。

結果は僕の勝ちだった。

まったく予想外であっけなく勝敗はついてしまった。

あの騎士団長はかなりの使い手として有名ならしいのだが……。

どうやら自分は思っていたよりかなり剣の腕は良かったようだ。

そうだとすると、僕が一度も勝てなかったあの祖父はいったい何者なのだろうか……？

たしか歳は80近いはずなのだが……。

あの人はもしかして、昔勇者でもしていて魔王を倒す旅でもしていたのだろうか？

そう言われても、十分納得できてしまう。

あの半端ない強さならさくつと一人で魔王倒してきそうだ……。

「エリスを守るためだから……」

「……でも……、もしもお姉ちゃんが……死んじゃったら……。わたし……わたしは……。うぐっ……」

「エリス……」

「うぐっ……。……ううええ……ん」

「大丈夫だから……。わたしは二度とエリスを一人ぼっちなんかに

しないから……、お姉ちゃんはこのにいるから……」
泣いているエリスを強く抱きしめ、大丈夫だからと繰り返すつづやく。

――。

――。

しばらくしてエリスは泣きやむと安心したのか僕に抱きついたまま眠りに就いた。

「すー……。すー……。すー……」

「エリス……、安心して眠り……。……必ず守って見せるから……」

少女は再び妹を守ると心に誓い、その決意を強めるのであった。

第十三話「別れと決意」(後書き)

p v 3 0 0 0 0、ユニーク5000、突破しました。
ありがとうございます。

遅いかもしれませんが、そろそろ登場人物設定を投稿したいと思います。

第十四話「王都グランマーセル？」

今僕とエリスとお母様の三人は、ウィンドルにある屋敷からは馬車で二日ほどの距離にあるランゴヴァルト王国の王都グランマーセルにいた。

王都グランマーセル。

それは一番高い位置に建つ王宮を中心に、まず貴族の住む一等区、次に有力な商人などの住む二等区、比較的裕福な一般市民の住む三等区、あまり仕事にありつけず貧しい人達の住む四等区が広がっている。

なぜ僕たちが王都にいるかというと、一週間後に迫ったお父様、アルバート・ウィンドル・ソフィネットの誕生日パーティーに向けての準備のためである。

エリスは当然僕の腕に絡ませひつついている。

ソフィネット家は名門でしかも一部からは疎まれているので、命を狙ったり誘拐しようとする者が現れる危険もあるので、リフィアをはじめ一般人の恰好をさせた護衛の騎士が後ろから二、三人隠れてついて来ている。

「お母様は元宮廷魔術師でその実力も確かものであるし、それにあのリフィアさんもいることだし、賊に襲われても無事対処できるであろう。」

「わくく、人がいっぱいだね……」

「そう驚いた様子でつぶやくのは妹のエリス。」

「すごい……」

「見渡す限り人、人……、人……、こんなにたくさんの人をみるのは前の世界を除けば初めてだろう。」

「王都グランマーセル……、三大国のなかでも一番の人口と規模をほこる都なのよ」

「あれは……」

「たくさんの人達の中にとろろ耳の長くどがった人を見かける。」

「おそらくハーフエルフね」

「エルフではなく……?」

「エルフは主に北西のフェルデン自治区に住んでおり、閉鎖的であり山から下りてきませんがハーフエルフは別で仕事にありつづために下りてくることが多いそうよ」

「ちなみにこの世界ではゲームや漫画みたいにハーフエルフだから」

といって差別されたりするわけではなく、むしろその高い魔力資質で王宮魔術師や魔法の研究機関に重宝されているらしい。

エルフのほかに獣人や、吸血鬼などの人種がいるが、ランゴヴァルト王国はその多くは人間でハーフエルフが少数いるだけであるので、人間以外の人種に会うのはこれが初めてである。

「へえ……、ということは……ハーフエルフでもないのに王宮魔術師だったお母様はすごいのでは……？」

「これでも私は王宮魔術師の中でも一位、二位を争う実力者だったのよ」

「っ!？」

元王宮魔術師のお母様、かつて英雄と呼ばれたお父様、そして無敵のメイド……リフィアさん。……どうして僕の周りにはこんな人たちがばかりなんだろう……？

「お母様すごいっ！エリスもお母様みたいに立派な人になりたいっ！」

「私とアルの娘ですもの……、きっと立派な大人になれるわよ」

「うんっ」

それから僕たちはお父様の誕生パーティのためのドレスを買い、貴族向けの衣服を取り扱う店に来ていた。

そして僕は今、二人に無理やり脱がされ下着姿になっていた。

「無理っ！無理だって……、そんなふりふりしたやつなんて……」

お母様が差し出すのはピンクのたくさんのふりふりがついた可愛いらしいドレスだった。

エリスならさぞかし似合うのだろうが……、二人はそれを僕に着せようとしているのだ。

「エリス、お姉ちゃんを抑えてて」

「うん、わかった。お姉ちゃんにはかわいいドレスをきてもらおうんだからっ」

エリスは後ろから僕を強く抱きしめ押さえつける。

「ひゃあっ」

「さあ……、さあ……。シーナちゃんこれを着るのよ」

「お姉ちゃんは可愛いからきつと似合うよ」

迫りくる二人。

それに抗えず無理やり着せられる僕。

「……あつ……うゝゝ、……ちよつ……だめだつて……」

「こっちのドレスもいいかも……」

「そうね……、この際いつそいろいろ試してみましよう」

あれからまるで着せ替え人形のように、何度もドレスを着せかえられそのたびにお母様とエリスだけでなく、店員にまでも可愛いと言われ恥ずかしくて死にたくなった。

ドレスを着せられた僕は頬を赤く染めた二人に鏡を見せられる。

そこに映るのは髪の色に合わせて濃い青を基調としたドレス、手には肘^{ひじ}まで隠れるロンググローブ、足にはハイヒールを身に付けた可憐な少女。

スカートの部分は白い半透明な生地と濃い青色の生地のひらひらで、首にはサファイアを埋め込んだ銀色のネックレス、胸にはバラを模した銀色の飾り、たっぷりなフリルに上品な色使いは目の前の少女にはとても似合っていた。

「これが……、……わたし……?」

「そうよ。かわいいでしょ」

まるでお姫様みたいだ……、心臓がときどきしちゃう……。自分

の姿にどきどきするなんて……。

「はぁう……………」

本人は気付いてないが、顔を赤らめてうつむいている様子はとてもいじらしく可憐で、誰もが思わず抱きしめたくなるような姿であった。

「お姉ちゃんっ！」

すりすり。

「エッ……エリス……、……ひゃあっ」

抱きつき胸に顔をうずめてくるエリス。

「だっだめだっ……」

「かわい過ぎるよ……お姉ちゃん」

ぴたっ。

すりすり。

むぎゅー。

「ひゃあっ」

「こんなに可愛かったらパーティーでもきつとモテモテね」

周りを見ると店内の客は男性女性関係なく、みな頬を赤らめてこちらを見ている。

「くっくくく」

やめてっく。恥ずかしすぎるっ。こんなの耐えられない……。

タタタタッ。

エリスから無理やり逃れ駆け出すが……、

むぎゅううー。

ドレスでは走りづらくすぐに追いつかれ、再び抱きつかれる。

「だめー。シーナお姉ちゃんはわたしの……」

すりすり。

「ひゃあああー」

結局しばらくの間エリスは離れてくれず、周囲にこの……ひらひらしたとても女の子らしい恥ずかしい恰好を晒すことに……。



あの後エリスのドレス（エリスのは白色の清楚な感じのだ）も買
い、お父様への誕生日プレゼントを探していたのだが、初めて来る
王都の品揃えに夢中になっているといつの間にか二人とはぐれてし
まった。

そして二人を探そうとうろうろしているとあまり人気のない薄暗
い所に来てしまった。

すると……、

ガシッ

後ろから肩を掴まれる。振り向くとそこには屈強そうな3、4
人の剣を腰につけた男たち。

おそらく傭兵か冒険者かなのだろう。

「お嬢ちゃん、僕たちとちょっと遊んで行かない？」

「そうそう……、お菓子とかいろいろ奢るからさあ」

「いやです」

きっぱり断る。子供だと油断しているようだし、いざって時は魔法を使えば逃げられるだろう。

「そんなこと言わずににさあ。それにこんなところにいると危ないよ。おじさんたちが安全な所までおくってあげるから」

「大丈夫です。それにあなたたちがそうなんじゃないですか？」

「……きゃっ」

突然男に強く掴まれる。

突然のことについて女の子っぽい反応をしてしまう。

「ガキがあ……、黙って着いて来ればいいんだよっ」

やばいかな？そろそろなんとかして逃げないと……。

「……………」

「何無視してんだよ餓鬼がっ」

僕に拳を向ける男。

それに対し、ブレスレットに手をかざし杖を出そうとする僕。

スタツ

突如上から飛び降りてきた謎の黒い影。

着地した瞬間、目にも止まらぬ速さで駆けだし男達へ向かう。

ボコツツガコゴギアルアアドスツジャリガコツ

すると響き渡る殴打や蹴り飛ばす音。

おそらく何人かは骨折しているだろう。

辺りは暗くて正体はわからないが……、この身のこなし、無慈悲なまでの容赦のない攻撃……それは記憶上のある人物と一致する。

「まさか……」

その謎の？人物は殴り合い（ではなく一方的に殴ったり蹴ったりだが）は終わったのか、光の当たるところまで歩き出てくる。

浮かび上がる正体。それはメイドの姿をした麗しい女性だった。それはまさしく……、

「リフィアさんっ」

やっぱりそれはリフィアさんであった。

何事もなかったかのように振る舞うその姿は少しばかり恐怖を感じさせた。

「お嬢様ご無事ですか？」

「うん……。特に何も……」

僕が魔法を使うまでもなかったな……。あの強さは異常だ……。

「なら……。行きましょう。お二人方がお待ちになっております」

「うっ……。うん」

リフィアの魔法を一切使わずに男達を叩きのめす姿に、その異常なまでの強さと容赦のなさを再確認するシーナであった。

第十四話「王都グランマーセル？」（後書き）

なかなか話が進まない気がする……。

一応二十話ぐらいまで一章は終わり、二章からは魔法学校での話になる予定です。

第十五話「王都グランマーセル？」

今僕の目の前にはたくさんさんの剣と防具がずらりと並んでいた。

そう、ここは武器屋兼、防具屋である。

以前お父様をお願いして注文して作ってもらった武器とマントを取りに来たのだ。

その代金として金貨1枚と銀貨3枚を渡す。

この世界で使われているお金は金貨、銀貨、銅貨の3種類で、金貨は銀貨10枚、銀貨は銅貨50枚である。その他にミスリル貨というのもあるそうだが、主に国家間での取引に使われ金貨100枚分の価値がある。なのでいくらソフィネット家が名門だろうとめったに見られるものではない。

この世界の人々平均月収は銀貨1枚ほどで、円に直すと10万円ぐらいだと思われる。またお金は世界共通でどの国に行っても使えるとのことだ。

ちなみに代金の金貨1枚と銀貨3枚は僕が倒した魔物の素材を売ったり、回復薬（まだ高性能のものは作れないが）を作り稼いだも

のである。親に頼めば喜んで出してくれるだろうが、まだ貴族の金銭感覚に慣れてないのか、円で130万円ほども出してもらうのは気が引ける。

「まずこれが頼まれていたカタナ？ていうやつだよ」

店員に渡されるのは刃長が約60cmほどの刀である。

「これは……」

この出来は本物の刀にもそう劣らないだろう。

実際もってみると、重過ぎず軽すぎずちょうどいい重さとなっている。これなら振りまわしてもそう手首が疲れたりしないだろう。

刀はこの世界には存在してなかったので腕の良い職人に作らせた特注品である。

10歳の少女の華奢な体では重い剣は扱えないし、この世界の剣は西洋と同じで切るのではなく刺すのに向いており、剣道で培った技術とは相性が悪いからである。これからは西洋の剣もちゃんと扱えるよう特訓していかねばならないだろう。

ちなみにブレスレットはあらゆる武器を魔力に変換して収納できる仕組みになっている。武器以外も入れようと思えばできるが、そんなにたくさんは入らないので普通は武器や防具以外入れない。

「そしてマント。消費魔力減少、耐久力上昇、耐熱、耐水などいろいろ付加してあるよ^{エンチャント}」

ナイフ程度に刺されたぐらいでは擦り跡すら残らないらしく、特別な生地が使われていて肌に触れる感触はすべすべしてて気持ちいい。

ソフィネット家の象徴であるアマリリスを模した紋章が大きく黒の生地に金色で刺繍してある。

「すごい……、肌触りがいいし……しかもかなり丈夫そう……」
覆ってみると、結構大きく膝の下あたりまでかかるがその軽さと柔軟さもあってそれほど邪魔にはならない。

「お姉ちゃんっ、かっこいいっ!」

無邪気にはしゃぎキラキラとした眼差しを向けてくるエリス。

「そう……?……ありがとう」

女の子になって初めて可愛いではなく、かっこいいと言われてかなり嬉しい。

嬉しくて思わずエリスをなでなでする。

「ふにゃああ………」

気持ち良くて幸せいっぱいそうな満面の笑み。

あいからわずその小動物のような愛くるしさはたまらない。

なでなで。

なでなでなでなで。

なでなでなでなでなでなで。

「はっ!？」

ずっとエリスをなで続けていたことに気づき、さすがにちよつとやりすぎたかとも思いエリスをなでるのをやめる。

すると……、

「……………きゅう……………」

ひどく残念そうな表情と向けられるうるうるした瞳。

だきつ。

ぎゅう。

「ほわあああ……………」

エリスの天使のような可愛さに悩殺される僕。……………やっぱりその表情は反則だ。

すりすりすりすり。

店主を始め多くの客の注目を集める中そんなのお構いなしに、いつまでもなでたりすりあったり抱き合ったりして2人の世界に入るシーナとエリスであった。



王都での買い物を終えた三人はソフィネット家の屋敷へ向かう馬車の中にいた。

二人ともはしゃぎ過ぎて疲れたのか、お母様はエリスに膝枕をして親子そろってぐっすり眠っている。

「すー、すー」

「……………そのタルトちょう……だい……じゅるり」

「……………ん……ハンバーグうー」

二人とも口の端からよだれが垂れている。

「エリスはともかくお母様まで……」
ちなみにタルトの方がお母様で、ハンバーグの方がエリスである。

お母様の子供っぽい性格と若く見える容姿で、二人はまるで仲の良い姉妹のようである。

ほんととても二児の母親だとは思えない。

お父様へのプレゼント。

僕が考えたのは手作りのお菓子である。

僕は三谷海斗だったとき、母親は作るのがめんどくさいと言って僕に小さい時から料理をさせていたので、料理の腕はある方だと思う。特に好物である甘い菓子類（ケーキ、ドーナツ、クッキーなどは結構自信がある。

それだけは放任主義どころか自分の子供として扱わない両親に、唯一褒められたことでもあった。

そして今回のお父様へのプレゼントにタルトとクッキーを作るつもりだ。

甘酸っぱいイチゴと森で見つけたあの幻のシユカの実をふんだんに使い生地にもこだわりのものを使う。

「そして……、生クリームできれいに仕上げて………じゅるり」

「「んん………」」

こちらの世界で手に入る道具や材料ではいろいろと勝手が違うだろうから事前に何回か練習するべきだろう。

あれで意外と甘いものは結構好きらしいので、できればお父様を驚かしたので秘密で作業しなくては……。

「楽しみだなあ……、ほかにもいろいろ作ってみようかなあ……。あっちの世界にはなかった果物や料理とかたくさんあるし……」

「ふわっふわっのシフォンケーキにとろけるように甘いシュカの実を入れるのも……、いや……生クリームをふんだんに使ったロールケーキにも……」

「「「………じゅるり………」」」

シーナのおいしそうなお菓子のつぶやきが耳に入ったのかよだれが垂らす二人とシーナだった。

第十六話「パーティで……」

「これで……よしっと」

僕はタルトに最後のフルーツを飾り付け、お父様へのプレゼントを完成させる。

僕が作ったのは四葉のクローバー型のアーモンド入りのココアクッキーや、しっとりさっくりメープルクッキー、プリン生地の上にシユカの実をはじめたくさんフルーツと生クリームを使った特製タルト。

「お父様、おどろくかな〜」

結構自信作である。ちよつと張り切り過ぎて作りすぎてしまったが。

「おいしそう………じゅるり」

「……………はっ!?!……………だめだっ。これは……………お父様へのプレゼント……………、プレゼント……………。たべちゃだめだ……………これはプレゼント……………、……………ふにゃっ?」

目の前のデザートについよだれを垂らし、食べたくなるのを必死に抑えてると、突然誰かに後ろから抱きつかれる。

「こんな所にいた。シーナちゃん……？……わああ……おいしそう……。これどうしたの？」

「……お父様へのプレゼントにと思って……」

「シーナちゃんが作ったの？」

「うん」

「すごいっ！おいしそう……。ときどきどっか行って見つからないと思ったら厨房でこんなことしたのね」

「……はい。お父様を驚かしたくて……。秘密にしてくれる？」

「うんわかった。……代わりにちよつと食べていい？」

「んー、クッキーならちよつと多く作りすぎたし……」

ぱくっ。

「何これっ！おいしいっ！」

ぱくっ。

ぱくっぱくっ。

ぱくっ、ぱくっぱくっ。

「ちょっ……だめだってっ！なくなっちゃうよ」

「ふーふがあっふほへぎふうふあ？（えーだってこれおいしいもから）」

「だ〜め」

「ふがあふ……ごくん。ねー……だめ？」

きらきらきらきら。

「うっ……」

まるで子犬のようにうるうるとねだるお母様。それはエリスと似ていて……、思わず抱きしまたくなるような………てっ……だめだ。

危うくそのあまりの可愛さに陥落されるところだった。……ていうかあなた本当に僕の母親ですか………。

「だめです。それにそろそろドレスに着替えないと……」

「う〜〜、……けち」

「けちでいいですよ。お母様も早くドレスに着替えないと」

最近お母様がなんだかものすごく子供っぽく見える。いやもともとこういう人だったのか？

表情とか仕草とかエリスにそっくりだし……、親子似たところとか……。



落ち込む僕。

格好はあのふりふりのドレスである。

濃い青を基調としたドレス、手には肘^{ひじ}まで隠れるロンググローブ、足にはハイヒールを身に付けた僕。ハイヒールはいまだに慣れず足がふらふらする。

メイド達に着替えを手伝ってもらったのが、着替え終わりメイド達の方へ向くと彼女達が固まってこっちを見ていたのだ。やっぱり僕には似合っていなかったのだろうか？

もうすぐパーティは始まり僕は出なければならぬのに、途端に不安になってきた僕。パーティはたくさんのお父様の友人やらほかの貴族やらが集うのだ。その中一人だけ浮いてたらどうしよう……と落ち込む。

「だいじょうぶよ。きっとシーナちゃんはパーティの参加者のだれよりも綺麗で可愛いわよ。だから自信持って。私が保証するわ」

「う……うん。……でも……」

「ほら……鏡。こんなに可愛いでしょ。だから自信持ちなさい」
鏡に映るのは顔を真っ赤に染めた少女。

「わかった。がんばってみる」

「さあ、もう始まるわよ」

「これよりっソフィネット家当主、アルバート・ウィンドル・ソフィネットの誕生日パーティを開催いたしますっ」
執事がパーティの開催を宣言する。

「おめでとうございます、ソフィネット侯爵」

「私からもお祝い申しあげます」

「皆さん、ありがとうございます。どうか、今宵はお楽しみになってください」

大広間はたくさんのきらびかな恰好をした人々。テーブルの上にはたくさんの豪華な料理やデザートが用意されている。皆お父様の

周りに集まりお祝いをしたりお話をしている。

緊張する。

この中を僕は……、

そして……、

「ソフィネット公爵長女、シーナ・ウィンドル・ソフィネット様、ご入場！」

先ほどの執事が入場を告げると、僕は前へ進み出た。

「「「「……………」」」」

ひょっとしてやっぱりどっか変だったのかな……。みんなこっちを見て固まっている。

「あ、あのー」

「「「「……………」」」」

「これは……………なんとも」

「ぜひ、ダンスのお相手を……」

「これほどとは……」

今度は私を見てあちこちで話し声が。

皆こっちを見つめている。恥ずかしい。

「……………シーナ？」

……と、貴族達に混ざって見覚えがあるような金髪の少年を見つける。

「……………ん？どこかで……………っ！？……………まさかつ……………かつ……………カルマっ？」

それは紛れもなく二週間前森で会い助けてもらい、1日だけだが共に過ごしたあの少年だった。

「シーナっ！」

「カルマ様っ」

「どうかしたのですか……………？」

「カルマ様、ちょっとお待ちに……………」

呆然と立ち尽くす僕のところ、カルマは彼の周りに集まっている貴族達の合間を抜け近寄ってくる。

「シーナっ。まさかこんなところで……」
やはりカルマだった。

このパーティは貴族しか招待されてないはず。なので最初はカルマはだれかの召使いかなんかなのだろうと思った。

……だが違った。問題はその格好だった。

「えっ……どうしてここに……？それにその格好……」
カルマは周りの貴族たちと同じ、身分の高い者しか着ることが許されないであろう装飾のたくさん施された上等なものを来ていたのである。

「シーナ……。あの時の服装から身分の高い者とは思ってたけど……、まさか君があソフイネット家の長女だったとは……」

「カッカルマ王子……。このようなパーティに……ようこそおいでになりました」

いつの間にか後ろに来ていたお母様がカルマにあいさつをする。

……ん？

「……王子？」

第十七話「襲撃者？」

「……………王子？」

あのカルマが……………？

「カルマが……………王子？」

「シーナちゃん？カルマ王子と知り合いなの？」

「う、うん……………、ほら……………この前言ったでしょ。森で同じくらいの年の男の子に助けてもらったって」

「そうなの？」

「はいそうです……………。彼女とは二週間ほど前、森で会いました」

「それより……………本当にカルマって王子だったの……………？」

「……………うん。黙っててごめん。それにあのときはお忍びで平民の恰好してたし、言っても信じてもらえないと思ったから……………」

「そう……………だったんだ。でも……………こんなに早く再会できるなんて思わなかった」

「僕もまた会えてうれしいよ……」

……ん？　なんだかカルマの顔がちょっと赤い……？　また風邪なのだろうか？

「でも……、すぐに君だと気付けなかったよ……。あの……その……、そのドレス似合ってた……前会った時よりもずっときれいでかわいくて……。……」

顔が熱い。

どうして……？　もう言われ慣れてきたと思ったのに……、カルマに言われるなんかとても恥ずかしい……。

「あら……シーナちゃん顔真っ赤っかよ……ふふっ」

「うううー」

はずかしいよ……。

………はっ！

僕はなんで男の子にかわいいと言われ赤くなってるんだっ。これじゃまるで心まで女の子になったみたいじゃないか……。僕は……。

「ふふっ……、私はお客様の相手をしなければならぬから向こう
行ってくるから。じゃあ後はお二人で」

「あっ……」

待ってお母様あー。この状態で二人だけにしないでっ。お願い
だから……。

「「……………」」

「シーナっ」

「カルマっ」

「そっちからいいよ」

「先にいいよ」

「やっぱ……なんでもない。……そっちは？」

「なんでもない……」

「「……………」」

気まずい。

だれかつ、どうかこの状況をなんとかして「お姉ちゃあっん」

て……。

タタタッ……、だきつ。

「エリスっ！」

ちょうどいいところに……。だけど……抱く力が強すぎて苦しいです。

「シーナ……？ いや、違う……君は？」

「ああ……、わたしの妹のエリスです」

「だから似てたのか……、ということは双子？」

「違うよ……。わたしの方が年上よ」

……なんか悔しいな。三つ下の妹と双子と思われるのは……。

「そうなのか。でもよく似ているからてっきり双子かと……」

「この人……だれ？」

エリスは僕と親しくしていたカルマが気にいらぬのかにらんでいる。

「カルマだよ……、カルマ王子」

「えっ……王子！？」

「そうだけど……」

「でもどうしてここに……？」

「ああ……。父上と君のお父上は古くからの友人で、父上はこのパーティーに来たがってたけど、さすがに王宮を不在にするわけにはいなくて、代わりに僕が来たというわけさ」

「そうだったんだ……。いくらソフィネット家が名門と言えどもただの誕生日パーティーに王子が来るとは思わなくて……」

……と僕。

「ちょっとお聞きしたいことがあるのですが……よろしいですか？」

何だろう？そんなに畏まって……。ぷるぷる震えて緊張してるみたいだし……。

「エリスちゃんだっけ？うん、……。それで、……。何？」

「……お姉ちゃんと……。その……。どういう関係ですか？まさかその……こっ……こっ……」

「い？」

こ……こ……、好敵手……？違うな……。じゃあ何だ？

「恋人なんですかっ？」

「「なっ……!？」」

ガシャンッ。　パリンッ。

肘を机にぶつけてしまいくつか皿が落ちてしまう。

「なっ……何言ってるの……? エリス?」

「だってお姉ちゃんとカルマ王子なんかものすごく仲が良いように見えたから……。なんかとても楽しそうに話していたし……。それでどうなんですか……?」

「ちっ違うよ、友達だよ。そうだよね……カルマ?」

「あ……。う、うん……。友達だよ、友達」

カルマは肯定してくれるがなんかひどく残念そう……。……何で?

「そうなの?」

「うん、カルマとはただの友達だよ」

グサッ。

ん……。?　なんか突き刺さるような音がきこえたような……。まあ
いっか。

「よかった……。カルマ王子、渡しませんから……。お姉ちゃんは
わたしのなんだから」

ぎゅううううー……。――。

痛いっ、痛いよっ。いつものことだけど今回はきつい……。でも悪気があるわけじゃないしむしろ好意があっただし……。

「エリスちゃん、そうはいかないよ」

「渡しません」

ばちばちばちっ。

二人ともどうしたんだ？先ほどまでと程度が全然違うような……。

「そんなに見つめあって……もしかして二人って結構仲が」「よくない（です）っ」「いい……？」

「そう……？なら……仲良くするのよ」

ばちばちばちばちっ。

「お姉ちゃんはわたしのものです」

「いや、僕が……」

「二人とも息ぴったしじゃん。やっぱり仲がよ」「よくないよっ」「……」

自覚が足りないのか、気付かない鈍感なシーナであった。



一方その頃、貴族たちがパーティで賑わっている最中、さなか屋敷の外に黒いローブを着て内部を探っている人物がいた。

「のんきなもんだな……貴族ってやつは。まあそれもいい。私の目的を果たしやすくなる」

顔はローブで隠れて目以外はわからないが、その声から若い女性だということわかる。

その女の手には鋭利なナイフ、腕にはブレスレットがはまっていた。

当然女はパーティに招かれた貴族ではなく、それを襲おうと企む賊か何かなのだろう。

「……………仇を……復讐を……」

そしてその女は助走もせず難なく二階のベランダに跳躍した。

僕はお父様へのプレゼントを取りに行くため、エリスは運ぶのを手伝うと言うので一緒に厨房まで来ていた。

「おいしそう。お姉ちゃん、食べてみていい？」

「だめよ。また今度作ってあげるから」

ここにあるのはお父様へあげる分しかない。というかお母様が余った分を皆食べてしまったというのがあるが……。

「え〜」

「今度何でも作ってあげるから」

「ほんと……？約束だよ」

「うん、わかってる。だから早くワゴンに乗せて運ぼう？」

さすがにタルトとクッキーを手で運ぶのは十歳の少女には少々無理があるので、料理運搬用のワゴンに乗せて運ぶつもりだ。タルトは張り切り過ぎて結構大きくなってしまったし……。

タルトは魔法で冷風で冷やしてあるし、後はお父様の所まで運ぶだけだったのだが……、

「これ運ばいいの？おねえちゃ……うつ！？……うぐっ」

「エリスっ！」

異変を感じエリスの方を見ると、そこには鋭利なナイフを突き付けられたエリスとローブを着た人物。

顔はフードで隠れてわからない。

「動くなっ！動いたら殺す」

「くっ……」

「ひさしぶりですね、シーナ様」

その襲撃者の声にはどこか聞きおぼえがあるような気がする。

いつ？どこで？

声から判断して若い女性だとわかる。が……、数々の戦闘で培ってきた直観がこの女はただ者ではないと告げている。

……とてつもなくいやな感じがする……。

「エリスを離せっ！それとお前は誰だっ！」

「ふふっ、ふふふっ。わかりませんか……？なら……これでどうですか？」

女は顔を隠していたフードを取り、そしてその顔が露わになる。

「おっお前はっ！」

その顔はあのとき、この世界に来たとき、目覚めて間もない僕に突然ナイフを突き付け襲いかかってきたあの女のものであった。

第十七話「襲撃者？」（後書き）

最中って、「さいちゅう」、「さなか」、「もなか」とどのように読んでも意味は同じなんですネ……。

でも「もなか」と読むとどうしても、餡子の入った和菓子しか思い浮かばないですね……。

第十八話「襲撃者？」

「どうしてお前がここにいるっ？何が目的だ？」

「それはあんた達ソフィネット家を潰すためさ。ここに集まった貴族もろとも殺す。ここには内政を担う身分の高い貴族も多く来ている。そうすればソフィネット家は責任を負わなければならなくなり、再び没落へと追い込まれるだろう。私はお前達のしたことは絶対許さないから……」

貴族の中には魔法が使えるものも多いが実戦経験が少ない者がほとんどである。

しかもドレスや動きづらい服装でその動きは制限され、それにこの建物の中ではあまり威力のある魔法は使えないし、接近戦を得意とするこの女がはるかに有利になるだろう。……となればかなりの犠牲者がでると思われる。

「……っ！？ どうしてそこまでする？ソフィネット家は確かにひどいことをしてきたかもしれないけど今は違う。今の当主、私の父様になってからは変わった……、だから……」

お父様は先の魔物の大進行で惜しみなく全面的に人々を支援し助け、葉だってより高性能に……より安価にして世界中に普及させ、各地に平民でも受けられるよう低料金の診療所を設けた。

かつて悪行の限りを尽くし、一度は没落にまで追い込まれそうになったソフィネット家を改革し生まれ変わらせたんだ。

たしかにソフィネット家は昔はひどいことをしてきたけど今は…
…。

「そんなの関係ないっ。何が英雄だっ！いくらたくさんの人を救おうと、今までにお前たちのしてきたことは消えない。たくさんの人を殺したことは変わらないっ！……私のお母さんもお父さんもっ！だからっ私はここでお前たちを殺すっ！」

女はエリスの首に突き付けていたナイフに力を込めると、エリスのその細い首はあっさりと切れ血は吹き出し、そしてナイフはそのまま頸動脈に達し切断………、

「エリスつつっ！」

……しなかった。

「なっっ！？」

ナイフはエリスの首に到達せず、目に見えない透明な障壁によって遮られていた。

女はそれに驚きその視界内から僕を外す。

そして僕はその隙を見逃さず女へと駆け抜け強引にナイフを奪うと、エリスを庇うように抱き力を込め後ろ蹴りを食らわせる。

タツ……タタツ、

ガシツ、ぎゅっ……ザシツ……。

「くっ……」

女はそれでバランスを崩し後ろへと倒れる。

「……………間に合ったか……。よかった……」

先ほどの見えない障壁は僕が咄嗟に発動させた小規模の結界魔法である。

女からエリスを取り戻し渾身の蹴りを食らわせたが、いくら鍛えたとはいえ一カ月じゃそう筋肉がつくわけないし、まして十歳ほどの体では大してダメージは与えられないだろう。

「ふっ……………ふふふっ」

思った通り女は大したダメージは受けてない様子ですぐに立ち上がり、こちらを睨みつける。

「ふふ……、痛いじゃないか。……とてもあのとき怯えて子犬のように震えていた少女には見えないな。まさかその年で魔法も使えるとはな……。子供だと侮ったのがいけなかったか……。……なら私も手加減することなくその身体を切り裂き引きちぎり、元の形がなくなるまで徹底的に甚振ってやろう」

女がローブをめくると腕にはブレスレット、それが一瞬光ったかと思うと女の手には刃渡り四十五センチほどの一対の剣、……双剣が握られていた。

そしてそれは赤く鈍い光を放っていた。つまり……。……それが示すのは……。……

「魔法が使えるということか……。やっかいですね……。……」
それに赤く光っているということは火属性を付加しているのだろうか……。……？

僕も同じくブレスレットから刀を出現させ女へ構える。

「さあて……。始めましょうか殺戮をねっ！」

女がこちらへ突撃してくるのと同時にエリスに可能な限り強力な防御結界をかける。

「そんなことしていいのかしら？油断してると死ぬわよ」

女の双剣は炎を纏いその威力を増している。その生み出す熱はさまざまに辺りの温度は急上昇する。

その灼熱の双剣は僕を切り刻み焼き尽くさんと欲す。

「お姉ちゃんっっ」

カチン。

女の双剣を片方は右手の刀で、もう片方は氷で作った盾で防ぐ。

火属性を纏った双剣から刀へとじわりじわりと熱が伝わってくる。咄嗟につくった氷の盾はその熱に耐えきれずその役目を終える。

「なら……」

こちらも刀に属性を付加する。

燃え盛る灼熱の炎には、全てを凍て尽くす氷。

パキッ、パキパキッ。

風と水の合成魔法、氷属性を付加させた刀は難なく炎に打ち勝ち、徐々女の双剣を凍らせていく。

「くっ!？」

このまま凍て尽くそうとするも、女はすばやく振り払うと2、3
メートル後ろへバックする。

「強いな……だがっ」

女は一瞬にして間合いを詰めると、目にも止まらぬ速さで右、左、
右、左と双剣を振り落とす。

それに対し僕は刀を最小限動かすことによって防ぎ、隙を見ては
魔法で応戦する。

「はあああー！ー！ーっ！」

シュン……、ガツン。ガコン……、ピキピキッ。

バコン、シュン……ザシュツ。

刀を振り落とせば女も双剣でガードする。

切っては防がれ、切っては防がれ、激しい攻防が続く。

隙を見つけては魔法を放つもどれも防がれてしまう。

女も魔法を使えばすぐこちらも応戦する。

この狭い建物の中では大規模な魔法は使えず、主に小規模の魔法と剣による小競り合いが続く。

お互いに向にダメージを与えることなく体力だけ消費され疲労が蓄積されていく。

「ちっ……なかなかやるわね。早く始末しないと気付かれるか……、ならば……」

「混沌なる闇よ……、具現化せし陰よ……、かの者を束縛し……、魂をも引き裂き……全てを食らい尽くせつ、デモンズ・イーターっ！」

影か？どこだ？薄暗くて分かりづらい。

「……そこかっ！」
すばやく術式を組み上げ光の矢を放つ。この程度なら詠唱は必要ない。

キュウウウー……。

命中したそれは直径十センチほどの円状の口、びっしりと生えた無数の鋭利な小さい歯を持つ蛇のような陰でできた化け物だった。
あんなのに噛まれたらひとたまりもないだろう。でもこれなら……。

ギュウウウウ……。

カランッ。刀を落とす音。

「……うつううー」

……苦しい。

先ほどのとは違う手の形をした陰で首を絞められているようだ。
だんだんとその力は強まる。

そうしている間にもどんどんと影は出現し身体は拘束され、さっ
きの蛇のような陰も現れる。

「死ね死ねっ、噛み殺せっ、食らい尽くせっ！……母さんや父さん
と同じ苦しみを味わらせてやるっ！」

「お姉ちゃんっ！……ねえ、やめてよっ！どうしてこんなことする
のっ……？」

「ふっふふふ、ふははははっ！死んじゃえっ、許さない許さないっ
！ふははっ……」

……やばい。

このままだと死……ぬ……。

ここで終わるのか……？こんな……ところでっ……、あっけなく……。

「うあっ……うううウウー」

もう……だめだ……。意識が……。遠のいて……。いく。

……僕は死ぬのか。

どっちみち一度死んでるんだ……。わずかだけでも新しい人生を送れただけでも……。

《それでいいの……？》

……ん？何……だ……。声が聞こえる……。

聞こえるというより脳に直接響いてくる感じ。それにどこか懐かしいような……。

《諦めるの？》

君は誰……？ それにもう無理なんだ……。僕は死ぬんだ。どうあがいたって……。

《あなたにはやらなければならないことがあるんじゃないの？》
やらなければならないこと……？

《あなたの大切なもの》

大切な……もの……？

《そう、あなたの大切なもの。守らなければならないもの》

「……うぐっ……ううー、……エ……リスっっ！」

そうだ……。僕は何をしてたんだ。エリスを守ると決めたんじゃないかっ。

この命を賭けてでも守ると決めんだっ！

《全てから守るのよ。あなたにはその力がある》

「っうああああアアううアアああー！ー！ー！」

僕はエリスを守る。

何が立ちふさがろうとも、

そのためには僕がどうなろうとも、

そんなもの僕が全て打ち破ってやるっ！

「くっ何だ？影がっ……押されているっ!？」

なんだか力が溢れてくる。

身体の奥底から膨大な何かが……。

これならエリスを守れるかもしれない。

それにこれはどこか懐かしい……。

「うっ……光がっ！」

二人の少女と一人の女は光に包み込まれる。

影を消滅させ辺りを埋め尽くす光。

すべてを飲み込む圧倒的なまでの光の氾濫。

やがてそれが収まると、そこには……………。

先ほどまでの少女とは打って変わり、目は金色に髪は青銀色に光り輝き、肌は透き通るように白く美しく、背中には八枚の光の翼を持ち、その姿はどこまでも神秘的で神々しかった。

第十八話「襲撃者？」（後書き）

すみません。

受験勉強のため9月からは不定期更新になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5427v/>

初恋の相手は前世の自分

2011年9月5日21時54分発行